

「シアネのように」

アトリエ カルヴァドス 制作

大宗せいる 著

草原の都ガイゼルは、石組みに守られた街である。ぶ厚く巨大な街壁が、楕円形の市街地をぐるりと完全にとり囲んでいる。そして、それを間近にあおぐ下町に、ヴォルグが暮らすアパートはあった。

「のどかだねえ」

全開の窓にもたれかかって、彼はさわやかな風をあびていた。ひしめくぼろ屋根の向こうに、無粋な壁がでんとそびえ立っている。そこでは人面を思わせる巨大な染みが、いつもの表情を向けていた。昼どきということもあるのだろうか。二階から見おろす砂利道に、人の姿は見あたらない。

「ふ、ふわああ」

するべきことはあるはずだった。せめて、埃が舞わないくらいに床を掃除しておこう。小山になった洗濯物を、綺麗さっぱり片づけよう。夕べ眠りにつく前に、一応の予定はたてていた。しかし、先刻寢床を出てからずっと、ヴォルグの立ち位置は変わっていない。

仕事の旅を終えてから、すでに五日がたってしまった。明日こそはと思いながらも、結局同じパターンで終わってしまう。することと言えば、剣や鎧の手

入れくらいだ。

隊商の旅に同行し、賊や獣を退ける。それが彼の生業だった。護衛者といえ  
ば通りはいいが、とどのつまりは平時の傭兵、用心棒に他ならない。

「しかし、見れば見るほど汚いな」

風を追いかけて回った顔に、ほどなく小さな苦笑が浮かぶ。散らかった部屋  
のまんなかに、埃の塵巻を見たからだった。

もしもきつちり屋の相棒と一緒にいたら、どんな反応をみせただろうか。

「な、なによこれえ！ これじゃまるで馬小屋じゃない」

そんな金切り声を浴びせられるか、冷たくため息をつかれるか。悪くすれば、  
平手のおまけまでつくかもしれない。

彼がシエラと知り合ったのは、今年の春のことだった。仕事で訪れたベルダ  
の街で、法術を使うところに出くわしたのだ。

地に落ちた雛を家に帰してやるために、彼女は栗毛をなびかせ宙へと浮いた。  
若草色のスカートに真っ赤なりボン。そんな格好はありふれた街娘そのもので、  
だからヴォルグは驚かされた。空を舞うなどという高度な術を、どうしてそん  
な娘が使えるのかと。もつとも、後に同業者と知ったときの衝撃は、その時ど  
ころではなかったのだが。

それから半年が過ぎさって、共にした仕事は両手をこえた。ヴォルグの剣と  
シエラの法術。そのコンビネーションも、同業者たちにすっかり浸透しつつあ  
る。

——あいつ忙しそうだから。わざわざ覗きにくるわきゃないか。

仕事の疲れもそろそろ抜けて、次を探したくなる頃合だった。が、そんなヴ

オルグの意に反し、彼女は待ったを掛けてきた。

「ごめーん。あっちにかかりつきりになっちゃいそうなの」

シエラは二つの仕事をかけもちしている。一つはヴォルグと同じ護衛者で、あとの一つは酒場の給仕だ。それには彼女なりの理由があつて、どちらにおいても決して手を抜こうとしない。

護衛の仕事で貯まった金で、故郷に宿屋を開きたい。それがシエラの夢であり、いつか実現するための給仕は大切な修行だという。

彼女の両親は、遠いレフィタル侯国で宿屋を営み暮らしていた。温泉の湧きでるその町は保養地として有名で、両手ほどの部屋はいつも旅人で満杯だった。ところが、十年前に起こった戦が、幸せのすべてを奪っていった。

戦火のただなかからシエラを救いだしたのは、後に義父となる護衛者だった。彼には同い年の娘がいたが、なんら分けへだてなく二人を愛し、遠慮することなく叱ってくれた。そんな義父に対する想いからシエラは護衛者を志し、そして彼をも失った。

己の未熟さゆえに、義父を死地へと追いやった。そんな重荷を背負ったままにシエラは今日まで生きてきた。そして、そのなかで大きな夢を見つづけてきた。

「ナゼルがね、やっとシチューを教えてくれるの。あれだけは、しっかり覚えておきたいのよね」

相棒となり、ガイゼルに居着くことになった彼女に、ヴォルグが紹介したのがナゼルの店だ。とりたてて高級でもまた大きくもないのだが、彼の人柄と料理の腕をシエラも気に入ってくれている。数ある店のメニューのなかでもシチ

ユーは冬の一番人気で、その習得に彼女は以前から執心していた。

「ねえ、教えて」

「だめだめ」

「今度の休み、返上するから」

「いやあ、シエラはほんとに働き者だな」

「知りたいったら知りたいの！」

「まあ、そのうちじっくり教えてやるさ」

何度も懇願してはみたのだが、ナゼルは取りあう素振りをみせてくれない。

彼女はすっかりじれきって、ある日、秘伝の虎の巻を盗み見しようとかくわだてた。が、不運にもその現場を押さえられ、すさまじい雷を落とされた。

「震えあがった？ 怖いもの知らずのシエラ様が？ そりゃ、どうにもイメー  
ジわかないなあ」

「笑いごとじゃないってばっ！ 包丁振りまわされるんじゃないかって、思わず身がまえちゃったんだから」

あの温厚な中年主人が、シエラにそこまで言わしめるとは。ヴォルグには意外としか思えなかったが、真剣な表情を見るかぎり、まるきりの嘘でもなさそうだった。それがいよいよというのであるから、相棒の意気ごみは相当だろう。

——ま、それまでのんびり待ってやるよ。

ということは、つまり時間はあるということだ。掃除にしる洗濯にしる、また日を改めてすればいい。そんな都合の良い理屈をこねて、ヴォルグは着の身のまま部屋をでた。扉が並んだ薄暗い廊下を進み、窮屈な階段をのんびり降りる。

——つたく、うまくいかないもんだよなあ。暇な時に限ってなんにも言っ  
てきやしないんだから。

絹雲を見あげての独白は、リュティスに向けてのものだった。シエラがそ  
うであるように、彼も別の仕事を持っている。だが、給仕と違って、その内容は  
決して公にできないものだ。

將軍リュティスの私兵《白狼》は、公的な力が及ばない、裏の世界で活動し  
ている。そして、正式なメンバーではないにしろ、ヴォルグは彼らの組織のな  
かにいた。

そのことに気づいているのはシエラをはじめ、わずか数人だけである。本来  
ならそれすら避けるべき事態だったが、意に反して表裏の人間関係が重なって  
しまう時はある。

「あなたの素顔が知りたくなった」

秘密の存在に気づいた彼女は、そう相棒になることを申しでた。惚れた弱み  
で受け入れてしまったものの、ヴォルグは内心ひやひやだった。うるさく嗅ぎ  
まわる者の存在を、白狼は放っておいてくれないだろうと。だが、意外にも、  
リュティスは正反対のことを彼らに命じた。

最近になって分かったことだが、彼女の過去は隅から隅まで調べあげられて  
いるらしい。内心、面白くはなかったが、そこまでしての結論だけに、安心し  
ても良さそうだった。

いくつかの井戸を通りすぎ何度か十字路を折れ行くうちに、砂利道は段々と  
広く、直線的になっていった。行きかう人の数も増え、都らしいにぎわいが広  
がりはじめる。そして、その向こうから、やがて美しい水柱が姿をみせた。

噴水が散らす細かな飛沫が、弓形の虹を浮かべている。大きな円形広場には、今日も多くの人々の姿があった。池を取りかこむ長椅子もほとんど全てが埋まっており、街路樹の影にいくつか空きがあるだけである。

——さあて、と。

まずは目的地を決めようと、ヴォルグは手近な空席に腰かけた。だが、元々気分のままに出かけた散歩だ。行きたい場所など特にはないし、やりたいことがあるわけでもない。すぐに思考は止まってしまつて、ぼうつと周囲を見渡しはじめる。

左の彼方には月の門。この都は南の帝都に発し北のデロスに至る太い街道に貫かれており、それに沿うように外縁の石壁が入りこんできている。月の門はそこに設けられた、言ってみれば巨大な穴だ。庶民と商業の街、西地区最大の門であり、人や荷の往来がもつとも激しい場所である。

一方、右の彼方には巨木に囲まれた大神殿。国中の神殿をたばねると同時に、人々の心のよりどころになっている。施療院もそこにあるため、訪れる人影が決してとぎれることはない。

——そうだな。墓参りでもしとくとするか。

聖職者たちに聞かれたら、たちまち叱責されそうな連想だった。が、とにかくにも散歩の終点が決まったわけだ。両親や姉たちが眠る墓所は、近くの市場の先にある。たむける花を買うのにも、ちょうど都合がいいだろう。だが、

歩きはじめたヴォルグの足は、わずか数歩で止まってしまった。目と鼻の先の長椅子に、よく知る人物を見たからだった。

「……ルファールじゃないか」

いつもなら、すぐさま歩みよっていただろう。だが、その横顔を満たした憂いが、ヴォルグにそれをためらわせた。

ナゼルの店に勤める彼女は、シェラの給仕の後輩だ。くりくりした眼が特徴的な、元気いっぱいの一九歳。少々天然ボケの気があるが決してしゃれにならないほどではないし、素直がすぎてずれた思考もかえって愉快にさせられる。だが、ヴォルグが目にした表情は、そんな性格におよそ似合わないものだった。

「よお、久しぶりだな」

「えっ？」

背後に回っての挨拶に、短めの髪が大きく揺れる。あどけない顔たちが輝いて、たちまち明るい返事がはじけた。

「なんだあ、ヴォルグさんじゃないですかー。誰かと思ってどきどきしちゃった」

彼女は胸に手をあてて、上げかけた腰をすんと落とす。

「おいおい。なんだはないだろ」

「あ！ ごめんなさい。そんなつもりじゃなかったんです」

となりに座ったヴォルグに向かい、彼女は「えへっ」と笑ってみせた。

「お仕事お疲れさまでした。兄さんから聞きましたけど、一度も襲われないですんだんですね？」

「そうそう。いつもあだといんだけどな」

彼女の兄、アルベインは穀物を手広く扱う、ベリオール商会の隊商長だ。そして、ヴォルグの秘密を垣間みた、数少ない者の一人でもある。危機一髪となった彼の隊を、白狼が救ったことがあるからだ。

その先導役をはたしたヴォルグと黒づくめの战士们との関係を、彼はいまだにつかんでいない。が、その力に期待してか、それとも恩義を感じてか、以来仲介屋に名指しで仕事を流してくれる。他の護衛者との争奪戦をしなくてすむから、ヴォルグたちにとっては上客だった。

「それはそうとき。なにを真剣に悩んでたんだ？」

「は？」

軽い調子の問いかけに、ルフアールはしばしきよとんと瞳を止めた。

「あ、あはは！ ヴォルグさんったら嫌だなあ。私、べつに悩んでなんか」

「ひょっとして男のことか？」

「ち、ち、ち、違いますっ！ そんなんじゃありません」

ちぎれんばかりに首を振り、そこで周囲の視線に気づいたらしい。

「……あ」

耳の先まで真っ赤に染めて、へなりと脱力してしまった。

——お、おいおい、ほんとに男かよ？

あまりに無神経だったかと、ヴォルグは反省しきりであった。が、謝罪を口にするより早く、そうする必要はなくなった。

「お店で失敗しちゃったんです」

「へっ？」

「夕べ、料理をお客さんにぶちまけちゃって」

はずれもはずれのかまかけで、倒れんばかりに恥ずかしがるとは。退屈させない娘だと、今さらながらヴォルグは思う。

看板間近のことだったという。織物で飾られたナゼルの店は、いつも以上に盛況だった。ぎちぎちに並べられたテーブルはそのほとんどが埋まっっていて、シェラもルフアールも、なにより厨房のナゼルも大忙しだった。そして、足りなくなったためおきの水をシェラが外に汲みに出た、そのすぐ後に事件は起きた。

やけにできあがりが遅れたソテーを、彼女は急いで運んでいた。作業着姿の注文主たちはすでにかなり酔っていて、横を通るたびにきつい文句を言われていたのだ。

「ああ。そういう奴っているよなあ。いくら仕事でも頭にくるだろ?」

「いいえ。お客さんは悪くないです。それより、いらいらさせちゃってるのが申しわけなくって」

そこでいったん言葉を切った、ルフアールの顔がくしゃりと歪む。

そう、だから、ついつい小走りになっていた。そして「お待たせしました!」と微笑もうとしたところで、急に背後から呼びかけられた。

「おーい、ルフアール! それが終わったら注文頼むぜ」

「はーい!」

いきなり何かにぶつかったのは、振りむいて数歩も行かぬうちだった。太い悲鳴とたちまち集まった視線のなかで、さあっと血の気が引いていく。こともあろうに、立ち上がった注文主に衝突してしまったのだ。色鮮やかな肉や野菜やそれにソースが宙を舞い、彼の作業着に降りそそぐ。

こちらの都合や状況などに、お客はいちいち気を回さない。彼らが歩きまわる店内は、つまり目抜き通りの雑踏と同じだ。だから、周囲に常に気を配れる。店に入った頃に何度もこうしたことをして、そのたびにシエラから注意されてきた。このところは粗相をおかすこともなく、もう身についたものだと思っていた。

「それなのに……」

哀しげな瞳を向けられて、ヴォルグは思わずたじろいだ。どう慰めればいいものか、頬をかきながら考える。結果、口をついたのは、どうにも芸のない一言だった。

「そうかあ。だけど、しちまったことは仕方がないさ。な？」

「いえ、そこから先が最悪なんです」

「先って……。まだ何かあったのか？」

こくつとうなずいてみせてから、ルフアールは大きく深く息をつく。

「私、すっかりあわてちゃって、しどろもどろになっちゃって。そしたら怒りだしちゃったんです、その人」

なにを言われたかは覚えていない。だが、そこで近くの常連客が、いきなり男に食ってかかった。

「『ぶどけるな』ってどなりながらつかみかかって。きつとうるさかったんだと思います。ディアさんもいい色になってましたから、我慢がきかなかったんでしょ？」

「で？ そのまま喧嘩になったって？」

「はい。もうものすごい取っ組みあいで。ナゼルさんが必死に止めてくれたん

ですけど、逆に何発か叩かれちゃって」

ルフアールは、もうどうしたらいいか分からなかった。夢中で間に割って入って、なんとか二人を引き離そうとした。そして、気がついた時には、彼らは空を飛んでいた。男はテーブルに突っこんで今度は熱々のシチューを浴び、壁に激突したディアはそのまま昏倒してしまう。

「は、ははっ！ そうか、そういうことか」

彼女の驚くべき怪力ぶりは、ヴォルグも何度か目撃していた。

「もう、信じられないばかりか！ あの子の先祖はぜえったい馬よ！」

相棒に言わせるとそうなるが、普段はまったく人なみななのだ。が、動転したり我を忘れてしまった時に抑えがきかなくなるらしい。

「そんなに……、おかしいですか？」

「あ……」

噴水の虹をじっと見つめる、ルフアールの顔に笑みはなかった。

「ご、ごめん。だけど、ほら、元気出せて。うじうじ悩んでるなんて、ルフアールらしくないと思うぞ」

「私だって落ちこむときくらいありますよお。先輩にもお客さんにも、すっかり迷惑かけちゃって。ほんと自分が嫌になります」

ふらふらになりながらも、男はナゼルに文句を飛ばす。ディアは大の字のまま動かない。人だかりのなかから野次が飛び、我関せずの者たちが早くしてくれと料理をせかす。シエラが水くみから戻ってきたのは、そんな混乱のただなかだった。

「あの騒ぎをあっという間に鎮めちゃうんですもん。先輩、やっぱりすごいで

す」

シエラはまったくあわてた様子をみせず、いきりたつ男に歩みよる。そして、同性のルフアールでさえどきりとするほど、色気たっぷりにやりこめた。ナゼルに着替えを手配して、それからきばきとディアを診る。状況が落ちつくにしたがつて、興味津々の観客たちも徐々に自席へ戻っていった。

「あとで怒られちゃいました。仕事に少し慣れたからって、気がぬけてるんじゃないかって。おろおろしてる間に、するべきことがあるだろうって」

「ふうん。そうかあ」

彼女はシエラを尊敬している。それもかなりの入れこみようで。

まるで飛ぶような身のこなし。柔らかでかわいらしく、そのうえ媚びを感じさせない客への応対。そんな先輩のようになりたいと、口癖のように話すのだった。

「いつもお客さんに迷惑かけて、先輩にしりぬぐいさせちゃって。少しは成長してる気でいたんですけど、やっぱり私ってだめですねえ」

「おいおい、まだ半年たってないんだろ？ そう決めつけるには早いって」

「えへへ、ありがとうございます。自分でもそう思うことにはしてるんですけど。人に言ってもらうと違いますね、やっぱり」

ヴォルグの慰めは、決してその場のぎのぎのものではなかった。

シエラが給仕をはじめたのは、確か三、四年前であるはずだ。加えて生家で暮らした子どもの頃にも、経験があると聞いている。いくら努力をしようとも、簡単に追いつけるはずがない。

「あーあ、だけどやっぱり落ちこんじゃうなあ。先輩みたいになりたいくて、こ

んなお守りまで買ったのに」

「お守り？」

「ええ、これなんですけど」

見れば彼女の胸元で、円いペンダントが揺れている。そこには大きく羽を広げた、つがいの鳥の姿があった。緻密に塗られた青色が、まだぴかぴかに新しい。

春に北からやってくる、小さな身体の旅行者たち。シアネは、愛と幸福の鳥とされている。はるかな昔、この国の礎を築いたリューベン王とその妃となるヒュリアの仲を、青い小鳥がとりもった。そんな顛末が語りつがれているからだ。それにあやかっつて、この国では恋愛の願かけにシアネの小物が使われる。

「でも、買ったその日にあの騒ぎですから。効きめないのかもしれないですね」

「どうだろう？ 奴らにとっちゃ専門外かもしれないからな」

「そうだとしてもいいんです。シアネでなくっっちゃ意味ないですから」

握りしめたペンダントに、ルファールは小声でなにかをささやく。なにを言っているのかと、興味がわくのが人情だった。が、そんな機先を制するように、彼女は身体を向きなおらせる。

「それより良かったんですか？ 私なんかにつきあってくれちゃって。もしかして、なにか用事があったんじゃない？」

「え？ いや、大丈夫だよ。暇つぶしに墓参りでもしようと思ったんだけどさ。」

まあ、そんなのは今度だっつていいんだし」

「なに言ってるんですか そんなのダメです！」

腰を跳ねあげたルファールに、周囲の視線が集まった。しかし、今し方とは

うって変わって、彼女はそれを気にしない。くりくりした眼をまっすぐ向けて、むりやりヴォルグを立ちあがらせる。

「お、おいおい。なんだよいきなり」

「そういうのはちゃんとその日にやらなくちゃ。先延ばしなんて良くないですよ」

両腕を腰にあてた、ルフアールの表情は真剣だ。ヴォルグの胸で、それが二番目の姉の姿とだぶる。やたらと両親に逆らう彼を、姉はこうして叱ったものだった。普段のとぼけた言動も、やはり二人はどこか似ている。

「じゃあ、そうするか。ルフアールに叱られたんじゃ逆らえないよな」

「えへへ。分かればよろしい」

苦笑まじりのうなずきに彼女はおどけた口調で応え、にっこりと安堵の笑みを浮かべてみせた。

それから赴いた共同墓地には、他にも多くの人々がやってきていた。家族連れもいれば一人きりの者もいる。一目で金持ちとわかる者もいれば、反対にみすぼらしい姿の者もいる。

こうした墓地のにぎわいは、秋独特のものだった。街壁に面した広大な敷地には、ほとんど陽をさえぎるものが存在しない。点在する大樹と高い街壁がわずかな影をつくるのみで、太陽の高い夏にはそれもひととき狭くなる。無数に飛びかっていた蝶たちまでもが何処へともなく姿をかくし、そしてその再来とともに一気に人影が増えるのだ。

「はじめまして。私、ルフアールっています。ヴォルグさんにはいつもお世

話になってます」

ひざまづいた祈りの声に、もちろん応えは返ってこない。ヴォルグが渡した花束を、彼女はそつと墓前にたむけた。

挨拶したいと彼女に言われ、ヴォルグははじめ大いに迷った。この場所を他人とともに訪れるなど、思いもしなかったことである。相棒であるシエラですら、ここに連れてきたことはない。にも関わらず、結局うなずいてしまったのはどうしてなのか？ それはヴォルグ自身にも分からなかった。ただぼんやりと、時のなせる技かと思う。

「ありがとな。みんなきつと喜んでるよ」

「ほんとにそうならいいんですけど。もしかしたら、どこのだいつだって怒ってたりして」

「はは、そんなことあるわけないさ。親父もお袋も姉貴たちも、みんな気さくな人だったから。じゃなきや……」

真夜中に訪ねてきた見知らぬ彼らを、家に入れたりはしなかったろう。

「じゃなきや？ なんです？」

「い、いや。なんでもないんだ。それより、広場にでもいかないか？ 出店のふかし芋でもおごつてやるよ」

「え？ ほんとですか」

「付きあってもらったお礼にね。時間、もう少しなら大丈夫だろ？」

「まだまだぜーんぜん平気です！ 今日はお店非番ですから」

弾むように走りだした彼女は少し先でヴォルグを待って、それから本当にうれしそうに笑ってみせた。

「約束ですよ？ 行つてから『やっぱりなし』なんてだめですよ？」

子どもが親にするごとく、腕にしがみついてヴォルグを引っぱる。そんなルファールの足取りが急にゆるやかになったのは、墓地の出口のことだった。

「あのお、ヴォルグさん？」

赤さびの鉄門をおおぎ見て、彼女はぼつりと問いかけた。

「護衛の時の先輩って、どんな感じなんですか？」

「感じって？ 性格のことかい？」

「え、ええ。まあ……」

「いかにも護衛者って感じの方がネタとしては面白いけど。残念ながら、ルファールの知ってるあいつとあんまり違つてないと思うぜ？」

半分は本心で、もう半分はごまかしたつた。給仕をしている時にせよ護衛をしている時にせよ、そこにいるのは確かにシェラだ。が、こと仕事の内容に関していえば、両者には決定的な違いがあつた。

「そうですかあ。つて、あれ？ もしかして顔になにかついてます？」

「いや、なんでそんなこと聞くのかなつて。まあ、あれだけころころ変わるからなあ。変に思うのも無理ないけどさ」

「あ、そ、そんなじゃないんです！ 私、先輩のこと大好きだし、それに尊敬してるから。だから、色々知りたいと思つて……」

なにしろルファールのことである。紅潮しての釈明は、おそらく本心に違ひなかつた。だが、何度もくりかえされる念押しが、ヴォルグはどうにも気になつた。

「それより急いで行きましょう！ あのお店、いつも閉めるの早いんですよ」

腕を引っぱる力の強さも、言外になにかあることを教えてくれる。彼が事の詳細を知ったのは、その何日かあとのことだった。



早朝にヴォルグを訪ねてきたのは、何度か見かけた顔だった。あれこれ考えるまでもなく、すぐにアルベインの部下だと思いだす。

今晚、ナゼルの店で待っている。シェラも交えて話したいから、看板の後にしたいと思う。用件だけを短く告げて、使いはすぐに帰っていった。

仕事の件であるならば、呼びだす必要などないだろう。いつもそうしているように、仲介屋を通せばいいはずだ。しかし、そんな疑問を持ちつつも、ヴォルグは彼に感謝していた。

「店にはあんまり来ないでちょうだい。働いてるとこ見られるの、あんまり好きじゃないからさ」

そう止められてしまっているせいで、なかなか好物のソーセージは味わえない。いい機会を作ってくれたお礼に、多少の無理なら聞いてやろう。そんな甘いことを考えながら、ヴォルグは夜ふけの街へと出かけていった。だが、やがてアルベインから聞かされたのはとてもそれくらいでは釣りあわぬ、なんとかやっかない相談だった。

「しつこいわね！ いやって何度も言ってるじゃない！」

客の引ききった店内に、シェラの怒声が響きわたった。長い栗毛をさつとはらって、対座したアルベインをねめつける。

「考えてもみなさいよ。なんで、仕事でもないことで神経すり減らさなくっちゃならないの？」

「礼はするって言ってるだろう？ そりゃ、俺の貯えなんてしれてるからな。いつもの仕事ほどは払えないがね」

「そういう問題じゃないってば！」

平手を受けたテーブルが、ワインの杯をぐらりとゆらした。あまりの鳴りに驚いたのか、厨房のナゼルがちらりと彼らの様子をうかがう。

「プレゼントだったら、他に気のきいたものがあるでしょう？ そんな危なかったしい計画に、いちいち他人をまきこまないで！」

シアネを妹に見せてやりたい。アルベインはいきなりそう切りだした。

幸せの鳥の渡来地は、ごく狭い範囲に限られる。ヴォルグが知っている限りでは、西部のアルモリカ湖周辺だけだ。行って帰ってくるのには、おそらく十日あまりが必要だろう。

「だいたい、出発するまで日がなすぎよ。こっちにだって、都合ってもんがあるんだからね！」

「しかたなかったんだって。もう少ししたらシアネは渡りに出ちまうだろうし、休みにしたって今しか取れない」

交渉は堂々めぐりをつづけるのみで、一向に決着の気配を見せない。

「誕生日のプレゼント、なにがいい？」

数日前のことだった。そんなアルベインの問いかけに、妹はなぜか激しくためらった。

「あのね、兄さん……」

蚊の鳴くような声色で二言三言を口に出し、結局そこまで黙ってしまおう。

だが、何度もうながしてやるうちに、望みの形がはっきりしてきた。

「兄さんの選んだものなら、なんでも気にいると思うもん」

毎年お決まりの質問へのそれがいつもの反応だったし、外での食事にしてろ、ちよつとした装飾品にしてろ、素直に喜んでくれていた。

そんな彼女のおねだりを、なんとか現実のものにしてやりたい。冷静な判断を下さぬうちに、アルベインはうなずいてしまっていたという。

「亡くなった親父がベリオール商会の隊長でな。言ってみりゃ、俺は跡を継いだわけなんだ」

黄金の帯が走る朝焼けの海。春の草原を覆いつくす、眼が痛くなるほどの若葉の緑。そして、そこを駆けぬける見たこともない獣たち。信じられぬほど広大な土地に、考えられぬ数の人々が暮らす帝都、グレイール。まだ幼かったころ、父から聞かされる旅の話に兄妹は瞳を輝かせて聞きいった。たまにか会えない彼と共にすごせるのが嬉しかったし、なにより街壁の向こうに強い憧れを持っていた。

大人になったら、二人で帝国中を旅しよう。そして、父に聞かされた光景を、自分たちの眼で見てやろう。おそれを知らぬ少年時代の、それが二人の合い言葉だった。

「親父の後押しもあったおかげで、俺はなんとか夢をかなえられてる。けど、ルファールの方はなかなかうまくいかなくてなあ」

ヴォルグもシエラも初耳だったが、彼女もまたベリオール商会に勤めたことがあるらしい。が、配属されたのは事務職で、くりかえした隊長への転属希望

もついに聞きいれてはもらえなかった。二年がんばって見た末に、結局辞めてしまったそうだ。

「女の一人旅にしる隊商の仕事にしる、そんなに現実には甘くない。あいつも、分かってると思うんだ。でも、一度だけでもいい。一生の思い出に、壁の外を旅してみたい。そう言われちゃったらさ、俺には断わりきれなかったよ」

「それはそっちの都合じゃないよ。仕事が仕事なんだから、護衛者なんて掃いて捨てるほど知ってるでしょう？ 素直に他へ頼みなさいよ」

「いや、だめだ」

「……！ どうしてよ」

さらりと否定を返されて、シエラの声量が一気に上がった。

「どうして私たちじゃなきゃいけないの こいつはどうだか知らないけどさ。

私、そんなに暇じゃないわよ！」

「それでもだめだ。あんたじゃなくっちゃ意味がない」

「もう耳たこ！ オウムみたいにおんなじ台詞をくりかえしてさ。あんた、ちよっとおかしいんじゃない？」

頭の横で指を回され、どんとアルベインが床を蹴る。だが、そんな行動とは裏腹に彼の表情は平静だった。

「シアネが目的だからだよ」

「……へ？」

いきなり話を戻されて、シエラは混乱しているようだった。頬にてのひらを押しつけて、何度か左右に首をかしげる。

「あ、あのさあ、アルベイン？」

「なんだ？」

「……ほんとに変になっちゃった？ それと私と、なんの関係があるっていの？」

かみ合わぬやり取りを聞きながら、ヴォルグは墓参の日のことを思いだしていた。

シアネでなくては意味がない。買ったてのペンダントを握りしめ、ルファールは謎めいたことを言っていた。あの時抱いた疑問の答えが、これではっきりするかもしれない。

「リューベン王の物語は知ってるか？ あいつが大好きだった話なんだが」

「当たり前でしょ。半年この街に住んでるあいだに、いやっていうほど耳にしたもの」

「そうか。それなら説明しやすいな」

ぐつとエールをあおったアルベインが、ぬれた鼻を拳でぬぐう。

「いつだったか、旅から帰ってきた親父が開口一番言ったんだ。『おーい、シアネをこの眼で見てきたぞ』って」

幸せの青い鳥が、現実の世界にもちゃんといる。それを知ったルファールははじめ眼を円くして、それから父の胸へと駆けこんだ。

「そんなあいつが言うんだよ。あんたはまるでシアネだって、それこそ口癖みたいだね」

どこからかこの国にやってきた、小さな幸せの配達人。客たちの表情を見ると、彼女はいつも思うのだという。軽やかな仕事ぶりはまるで空を舞うかのようなだし、瞳やリボンもシアネの色を連想させると。

「あなたのことを話したとき、いつまでたっても終わらないんだ」

「へえ……。そうなの？」

シエラはそっぽを向いたまま、そう問いなおしたきりだった。小さくちつと舌をならして、居心地が悪そうに身体をゆらす。

「いつか先輩みたいになるんだって、仕事を楽しみにしてたんだけどな。この話をしている時に、急に辞めるって言い出したんだ」

「……！ な、な、なによそれ？」

アルベインは、予兆を感じとっていたという。明るイルファールの口数が、このところ極端に減っていた。話しかけても上の空で、ふさぎこんでいることが多かった。

「自信喪失ってことらしい。あなたと自分を比べちまって、嫌になってるらしいんだ」

辞職の決意を固めたからこそ、彼女はシエラと行きたがっている。共通の思いを欲しがっている。ぐっと身体を乗りだして、アルベインは訴えた。

「……」

なにも言おうとしないまま、シエラは考えこんでいた。あちこちに下げられた壁かけを、順に青い瞳がたどる。

「ごめん、アルベイン。私、やっぱりやめとくわ。事情については分かっただけだよ。……そういうことならなおさら、ね」

「それじゃこれで決まりだな。俺もこいつと同じだよ」

「……ヴォルグ？」

シエラの驚いた表情に、彼は思わず苦笑した。こいつは向こうにつくだらう。

そう思われていたに違いない。

「あなたは女に甘すぎんよ！」

こうしたことがあるたびに、ヴォルグは彼女の非難をあびる。充分すぎるほど自覚があるから、いちいち否定をしたりはしない。だが、今夜に限ってはいつもと違った。

どちらへ転ぶことになるにせよ、相棒の判断を優先しよう。事情を聞かされ終わらぬうちから、彼は心に決めていた。

「そうか……。それじゃあきらめるしかなさそうだなあ」

深いため息をもらしつつ、すっとアルベインが席を立つ。彼はいくどかごしごしとこすった顔に、かすかな笑顔を浮かべて消した。

「無理言っちゃまって悪かった。これからも隊のお守りをよろしく頼む」

アルベインが店を出ていくと、二人は互いに黙りこくった。街はどうに寝静まり、足音も酔客の大声も聞こえてこない。重たい静寂はしばらくつづき、やがてシエラがそれを破った。

「ねえねえ、明日は大雨降るかもね」

「へ？ なんだいそりゃあ？」

呆氣にとられるヴォルグの肩を、白い指先がちょこんとつつく。

「あんたらしくないじゃない。あんなにはつきり断るなんてさ」

「お前とおんなじ理屈だよ。働いてるとこなんて、あんまり見られたくないからな」

「あはっ！ あのこと、いまだに根に持ってるの？」

短い笑いをはじけさせ、シエラはいつものようにワインをなめた。が、その

表情も声色もどこか暗く湿っぽい。

「そっかあ。あんたも似たようなこと考えてたんだ」

表を吹きゆく秋の夜風が、ときたま扉を小さく鳴らす。ろうそくの炎とシエラの栗毛が、そのたびごとにふわふわ揺れた。

「ふうん。ずいぶんと困りはててるみたいじゃないか」

杯を取りかえる腕をたどると、そこにはナゼルの姿があった。調理着に染みた色とりどりの円形が、一日の奮闘を物語る。

「まあ、これでも呑みながらじっくり考えてみるといい」

厳めしい顔だちに似合わぬ笑みが、見あげる二人に送られた。

「なんだよ。無関心なふりして、話はすっかり聞いてたのかい？」

「なにを言う。あれだけ大声だしてりゃな、となりの婆さんにだってつつぬけさ。まったく近所迷惑もいいとこだ」

「あ、ご、ごめんね、ナゼル。なんかいらいらしちゃってさ」

「いい、いい」

気まぎれなシエラの眼前で、彼は毛深い腕を左右にふった。空いた椅子へと腰をかけ、おだやかな視線を彼女にむける。

「あれだけ懐いてくれてるもんな。なんとか助けてやりたいんだろ？」

「違うわっ！ だって、そんなあの子の勝手じゃないよ！」

とたんにはじけた金切り声にも、しかしナゼルは平気のへいぎだ。

「ほら、静かに」

なにやら意味ありげに笑ってみせて、ひとさし指を口へと運ぶ。と、シエラは「うっ」と小さくもらして、それきり言葉につまってしまった。

「なにを怖がってるのか知らないが、あの子は頭がいいからな。おかしなことになったとしても、きつと肥やしにしちまうさ」

本音を察して言っているのか、ヴォルグに分かるはずはない。しかし、そうでなかったとしても、内容は本質をついていた。

「店のことなら心配するな。それくらいの間なら、知り合いの店から人手を借りるさ。で、実は頼みがあるんだよ。いや、頼みというより、こいつは仕事だ」

「……仕事お？」

「ああ。先輩として、あの子を説得してきてほしい。せつかく二枚看板ができつつのに、今いなくなられちゃ台なしなんだよ。うまくいったら、そうだな。シチューのあとで、包み焼きでも教えてやろう。ただし、失敗したらどっちもなしだ」

シエラは返事をしなかった。代わりに、およそらしくない勢いで杯のワインを一気に呑みほす。

「あのさあ、ヴォルグ」

「ん？」

ふうっと大きくつかれた息が、甘い香りをほのかに散らした。

「もしもよ。もしも、私が行くって言ったたら、あんたいっただいどうするつもり？」  
わざわざ問われるまでもなく、ヴォルグにごねるつもりはなかった。

「さっき言わなかったっけ？ 俺はお前と同じだったさ」

「ああ、そういやそんな覚えもあるわね。それじゃ、ひとつ走り追いかけて、あいつと予定あわせてきてよ。出発の時間と、それに待ち合わせの場所ってとこね」

「へ……？ 俺が、かよ？ 話の主役はお前だろうに」

「男でしょ？ かわいい相棒がこうしてお願いしてるんだから、文句言わずに引きうけなさい。だいたいね、ぐだぐだしてたあんたと違って、こっちは仕事で疲れてるのよ」

「へえへえ。まったくおおせの通りです」

いったいどこが「かわいい」くて、これのどこが「お願い」なのか。ヴォルグは失笑とともに頭上をあおぐ。が、それでも心に不満はなかった。

「急いで行ってくるからさ。戻ってくるまで待っていてくれよ」

立ち上がりつつの一言にシエラは小さく微笑んで、それから胸で両手をあわせてみせた。



とうに陽が昇っている頃合なのに、出発の朝は薄暗かった。頭上をおおった雲の底から、ぱらぱら小雨が落ちてくる。ぬれた街壁や石畳の色が、いつものそれより濃く重い。

——まあ、秋は雨が多いから。初日でかえって良かったかもな。

皮のコートで身をおおい、ヴォルグは少し早めに部屋を出た。フードのなかから見上げてみると、雲は思ったほどに厚くない。どうやら、長雨の心配はなさそうだった。

アルベイン指定の集合場所は、街を出てすぐの草はらだ。いつもの仕事と同じだが、今日は拾っていくべき者がいた。

朝の混雑に邪魔をされつつ、月の門をひたすら目指す。やがてそれをくぐり抜けると、周囲はようやく静かになった。都をつらぬく街道は、他のどの通りよりはるかに広い。行く者の数が変わらなくても、流れの密度はうすくなる。そして、それをはさんだ太陽の門に、ヴォルグは旅の道づれを見いだした。やはりコートに身を固め、鞍つきの馬をしたがえている。

「おはようございます」

歩みよるヴォルグにすぐさま気づき、彼はフードを外してにこりと笑った。

「よお、フューリイ。いいのを連れてきてくれたみたいだな」

「もちろんですよ。あんまり時間がなかったおかげで、手配に苦労しましたけどね」

この金髪の若者は、リュティスの秘蔵っ子とでもいうべき存在だ。同じ白狼の一員ながら、協力員のヴォルグとは立場が違う。

その整った顔だちからは、いまだ少年の香りが消えきっていない。背が高いとは言えないし身体の線も細いからとてもそうは見えないが、彼は真正正銘、あちらの世界の住人なのだ。

「それにしても、お前とシアネ見物とはね。おかしなことになっちゃったよな」  
「はは、そうですね。でも、あの方が『行け』とおっしゃるのなら、私は黙ってしたがうだけです。仕事以外で言われたことは、これがはじめてですけれど」  
ヴォルグは気の毒に思っていた。この件でもっとも驚かされたのは、実はこいつなのかもしれないと。

協力員とはいうものの、長く家を空ける時には彼らへの連絡が必須とされる。だから、ナゼルの店から帰った深夜に、ヴォルグは窓の金具へひもをからめた。

それが連絡ありの印になって、たいていはどこかでフューリイが接触してくる。だが、今回はまだその先につづきがあった。翌日になって、彼が同行を申しでてきたのである。

ルファールのための旅なのだから、白狼がらみは勘弁してくれ。ヴォルグはもちろん抵抗したが、リュティス直筆の手紙を読まされ、ついに受け入れるしかなかった。旅なれぬだろう娘のために、馬を一頭用意しよう。それに神に誓って仕事ではない。純粹に旅の仲間としてなのだ。

やがて到着した集合場所では、いくつかの隊商が出発準備の最中だった。とはいえ、行きかう人馬や荷の数は、いつものそれよりはるかに少ない。大半の隊はすでに出発していったのだろう。緑のじゅうたんのそこかしこに、喧噪のなごりだけが残されている。

「おはようございます、ヴォルグさん！」

ぱつと振りむいたルファールが、明るい声をはじけさす。左右に振られるコートコートの袖から、細かな雨粒が飛びちった。

「紹介するよ。こいつが例の『馬のおまけ』さ」

「はじめまして！ 私、ルファールっていいいます」

「よろしく。それとすみません。楽しい旅に、なんか凶々しくおしかけちゃって」

「あははー、全然そんなことないですよ。超一流の護衛者さんと、一緒にお出かけできるんですもん。仕事のこととか旅のこととか、色々教えて下さいね」

「は、はあ。喜んで」

「頼りにしてるわよ、『超一流の護衛者』さん？」

ちくちくいじめるシエラにむけ、たちまち抗議の視線が飛んだ。だが、彼女は気にする様子もみせず、にやりと笑うのみである。

あまり首を突っこむと、ヴォルグを悲しませることになるだろう。そんな警告を、彼女はフューリイから受けていた。関わりあうなと言うくせに、どうしてのこのこついてくるのか。事前に話を聞かされて、反発したのも当然だった。

「ああ、あの時あなたが連れてきた『正義の味方』とかいう奴か」

隊を救った黒づくめの戦士のことを、アルベインも鮮明に記憶していた。

「いつか聞こうと思ってたんだが。あんた……、あいつとどういう関係なんだ？」

予想していた質問に、ヴォルグはもちろん答えていない。みえみえの嘘かもしれないが、護衛者仲間で納得してくれ。苦笑しつつの説得に、彼はいぶかしげながらもうなずいた。フューリイに恩を感じていたのだろうし、無理な依頼をしたという、負いめもあつたに違いない。

「さあ、これで全員そろったことだし、そろそろ行くとしようじゃないか」

ぬれた鞍を拭きながら、アルベインは明るさを増した空を見あげる。と、そのはるか彼方から、ぱつと陽ざしがさしこんできた。

「わあ、ほらほら！ 虹ですよ！ すっごーい！」

ルファールの上ずった歓声を、皆の視線が追いかける。美しい七色の弓形は、まるで草原にそびえる巨大な門だ。そのきらめきを追いかけて、アルモリカ湖への旅ははじまった。

かすかに見えていた街壁も、いよいよ霞のなかへ姿を消した。ほどなく広い

街道に別れを告げて、ヴォルグたちは西部随一の都市、リューベンへの道に歩みを進めた。古の人名が冠されているわけは、そこが彼の王国の都であったからである。

アルモリカ湖は旧都の数日ばかり手前に位置し、物語ではそこで異国の娘と王子が出会う。そしてクライマックスで、彼女はこの道、ダイヴェド街道を通って嫁いでいくのだ。様々な障害をのりこえて、晴れて王となった男の元に。

だが、そんな夢にあふれた話の舞台も、歩けばただの枝道だ。はるかに続く草原もあちこちに散らばる林や森も、この国では極々ありふれた光景だから。しかし旅の主役には、それすらも新鮮であるらしかった。はずむような声色やフードのなかで輝く瞳が、喜びのほどを物語る。

「寒くない？」

「ええ、大丈夫です」

馬上をおおぐシエラに向け、彼女はにこりとうなずいた。

雲はいよいよ切れはじめ、雨もほとんどやんでいる。が、ときおり思いだしたようにざあつとくるから、コートを脱ぐには早かった。

「身体ぬらしたりしないようにね。後から急に冷えてくるから」

「ありがとうございます。ヴォルグさんもフューリイさんも、それに兄さんも。

みんながくれた最高のプレゼント、私一生忘れません」

「はは、そんな大げさな話じゃないさ。どうせ暇をもてあましてたし、フューリイだってそうだったんだ。なあ？」

「は……？」

きよとんとするのも無理はなかった。白狼の中心人物たるフューリイに、そ

んな余裕などあるはずはない。が、そんな現実はさておいて、彼は話をあわせてくれた。

「え、ええ。そんなこと気にしてないで、せっかくの休みを楽しみましょう」

「私もさあ、たまには遊ばせてもらうつもりなの。仕事や雑用は二人に任せて、あんと一緒に目いっぱい、ね。ま、そういうわけだから、よろしく頼むわあんだ達」

「了解了解。そのへんのことには任しとけて」

実際のところ、シエラの様子はいつもと違った。

アルベインが引く馬によりそって、おだやかにルフアールと会話をかわす。

彼女が笑えば一緒に笑い、何かを示す指先を興味津々追いかける。故郷の光景を懐かしそうに話したり、相棒がいかにだらしないかをはでに誇張して聞かせてやったり。そのいずれもが、護衛者としても給仕としても決して見せない顔だった。

「先輩！ また町が見えてきましたよ。これで、ええつと……、四つめですよ？」

「五つめじゃなかったかしら？」

「えー？ 四つですよ。ねえ、ヴォルグさん？ そうですよね？」

「残念ながらシエラが正解。今夜はあそこで一泊だ」

「ほーらね」

シエラに足をつつかれて、ルフアールのほつぺたが大きくふくらむ。それがぷうっと噴きだして、たちまちころとした笑いになった。

「あはははっ！ 着いたらゆっくり湯浴みでもして、それからご飯食べようね。」

うーんと贅沢しちゃってさ」

「よおし、お腹いっぱい食べちゃうぞお」

妹がはずませた返答に、アルベインの背中がぴくりと動く。

——はは。兄貴つてのも大変だねえ。

たまにはこういう旅もいいかもしれない。こみあげる笑いをおさえつつ、ヴォルグはあらためて実感していた。懐の心配が必要なのも、これが仕事ではないからだ。そして、そんな旅であるゆえに、様々なものが見えてくる。

やがて町に入るころには、雨はすっかりやんでいた。まるで燃えているような夕焼けが、明日の陽光を約束している。窮屈で重たいコートを、どうやらしまいこむことができそうだった。部屋もすんなりと確保でき、こうして旅の初日は終わっていった。



空はどこまでも青くすみきり、ただよう白雲がまばゆいばかりに輝いている。雨が汚れやほこりを洗い流したためだろう。草原の緑が眼にしみる。初日はほとんど見かけなかった虫や鳥や動物たちが秋の陽ざしに生を謳歌し、ルファールにたびたび歓声をあげさせた。

旅は順調のうちに進んでいった。天候悪化の予兆は見えず、どうやらアルモリカ湖までもちそうである。強めの風が気にはなったが、おかげで湿気も感じない。暑くもなければ寒くもなくて、のんびり行くにはちょうどいい。

そして訪れた四日めの夜は、ルファール念願の野宿となった。たき火を囲ん

での食事がすむと、皆はヴォルグを残して眠りについた。

——寝ながらにこにこしちゃまって。シアネの夢でも見てるのかねえ。

横たわる彼女らの向こうには、月光がおだやかな山なみを浮かばせている。

そこに生いしげる森を登れば、目指すアルモリカ湖があるはずだった。

玄関口であるティエリアの町には、陽が低いうちに入れるだろう。宿に荷物をあずけたら、いよいよシアネ見物のはじまりだ。

「寝といた方がいいんじゃないか？　ここから先が本番なんだし、ルファールきつとはしゃぎまくるぞ」

そんなヴォルグのうながしに、かたわらの相棒がくくつと笑う。

「それは確かにそうなんだけどさ。なにからなにまで、全部押しつけちゃってるからね」

少しきつくはなるのだが、ヴォルグとフューリイが交替で。それが見はりの段取りだった。が、彼女は毛布にくるまらず、こうして腰を並べてくれている。

「なあ、シエラ」

「……ん？」

「いったいどうするつもりだよ？　ナゼルに説得頼まれてたろ？」

「ああ、そのことかあ……」

輝くルファールの表情に、なかなか切りだすきつかけがつかめない。顔をてのひらで支えつつ、シエラは困った顔をしてみせた。

「私、どうすればいいんだろうね？」

「うーん。急にそんなこと聞かれてもなあ」

彼女の気持ちは、今も変わっていないのだろうか？　そうなのだろうとヴォ

ルグは思う。シエラとの楽しげなやり取りに、なぜか店の話題はでてこない。

二人の出会いも過ごした時も、思いでのほとんどがある場所なのに、だ。

「すまん。俺にもちよつと分からない。ただ、さ」

「ただ？ なあに？」

「なんにせよ、このままいい旅で終わるといいよな」

「……そうね」

小さくうなずいてみせたきり、シエラはしばし黙りこくった。栗毛をおさえでの微笑みが、干し草のベッドに向けられる。と、燃える炎のかたわらで、フューリーの毛布がもそりと動いた。彼はそのまま起きあがり、足音を殺してやってくる。

「よお。ひよつとしてうるさかったか？」

「いえ、そろそろ交替の時間ですから。それにどうも眠りが浅いんですね。

こういう旅には慣れてないんで、やっぱり緊張してるんでしょう」

乱れた金髪に手ぐしを入れつつ、彼は口元をゆるめてみせた。そしてその表情を崩さぬままに、眼下のシエラをじっと見つめる。

「もしも、ですよ。もしもそうならなかったら、あなたは どうするつもりですか？ 意地悪に聞こえるかもしれませんが、それによって戦い方を変えなきゃいけない」

「……いつも通りに決まってるでしょ」

「本当ですね？ あれほど慕ってくれる子の前で、得意の法術を使うんですね？」

「戦うって言ったたら戦うの。男のくせにしつこいわねえ」

きつと見あげての肯定は、かすかなよどみすら含んでいない。そう、それは彼女があ晩に、散々悩んだことだった。

「それにね。そうだったらそうだったでいいのかもって、私、ちよつと思ってるんだ。あの子は遅かれ早かれ気づくでしょうし、いつかは知らなきゃいけないことだわ」

「そうですか。それなら私も安心です」

にっこりしてのうなずきに、しかしシエラ表情は変わらなかった。きつい視線を逸らさないまま、フューリーの眼前に立ちあがる。

「だいたいさ。どういう旅になるのかは、あんた次第じゃないかしら？」

「は、あ？」

胸に指を突きたてられて、フューリーは一步二歩と後ずさる。と、指先が再び強く鎧を押しした。

「まさか仕事がらみじゃないんでしょうね？ あの子を余計なことに引きずりこんだら……。もしもそんなことしたら、私あんたを許さないから！」

「だ、大丈夫ですよ。今回はほんとにそうじゃありません」

「どうだかね」

ふんと鼻を鳴らしつつ、シエラは小柄な身体を向きなおらせた。

「あんたもよ、ヴォルグ！ ちゃんと分別つけなさいよね」

とげとげしい警告を浴びせかけ、干し草のベッドに去っていく。

「あいつの言うことは本当だ。相棒の俺が保証するって」

となりにごろりと寝ころびながら、ヴォルグは彼女にささやきかけた。が、待てども答えは返ってこない。ぴくりと頭をゆらしたことが、シエラの唯一の

反応だった。

テイエリアは意外に大きな町だった。あくまでも近辺のものどくらべればだが、それでも道が舗装されていたり周囲を街壁が囲んでいたりと、さらには各所に井戸が掘られていたり、環境もなかなかの充実ぶりだ。

「それもシアネのおかげだよ。あとは帝国中の飲んべえたちのね」

宿の若主人に言わせると、それには理由があるらしい。

この町には「シアネ御殿」の通称をもつ、白壁の豪邸が建っている。主はベルディアという名の商人で、シアネの剥製と古くから伝わる銘酒を一手に扱っているのだそうだ。亡き先代から引きついで商売を一気に拡大してみせたやり手であつて、若き領主クルーニスとは国都でともに学んだ仲だ。

つまりは「町の名士」というわけなのだが、そんな賛辞もどうやら伊達ではないようだった。聞けば、巨額な儲けのかなりの部分が、この町の整備に充てられているらしい。協力を惜しまないクルーニスとともにだから皆の尊敬を集めていると、初老の主人は熱く語った。

「そうか。そりゃあ、いいことを聞かせてくれたよ」

満面の笑みを浮かべつつ、アルベインが彼に握手を求める。それにはヴォルグも驚かなかつた。わざわざ尋ねるまでもなく、商売がらみに違いない。だが、フューリイが興味を示してみせたのは、思いもよらないことだった。

「剥製は、この時期だと手に入りにくいそうですね。なんでも、春に決まった数しか作られないとか？」

「その通り。よそ者なのによく知ってるな」

「だけど、どうでしょう？ その方のところにならあるのでは？」

「そりゃ一つや二つは残ってるだろうが、買いとろうったって無理な話さ。あんたの財布じゃ、きつと百個あつても足りやしないよ」

ただでさえ高価な品のことである。なかばかにしたような、主人の口調も当然だった。が、フューリイにそれを気にする様子などない。

「あはは、まったくおっしやる通りです。やっぱりあきらめるしかないかなあ」

「お、おいおい。お前、そんな趣味あつたのか？」

ヴォルグのそんなささやきに、人さし指が上をさす。おだやかな表情はそのままだったが、眉間にしわが寄っていた。

——なに？ リユティスのおっさんのお使いか？

これが彼を同行させた目的なのか？ もしも本当にそうならば、剣の肥やしにしてくれる。ヴォルグが固めたそんな決意は、しかし突然の呼び声に吹きとばされた。

「兄さん、ヴォルグさん、フューリイさあん！ 帰りが遅くなっちゃいますよお！」

表に通じる扉の向こうで、ルファールはかなり急いているようだった。アルベインはなおもなにかを問おうとしたが、それは駆けこんできたシエラに阻止された。

「お、そ、いー！」

「あ、す、すまん」

妹に頬をふくらまされて、アルベインは我に返ったようだった。狼狽しきつた表情で、後ろの二人をちらちら見やる。

「お、俺は急ごうって言ったんだけどさ。こいつが余計なことを色々聞いてて……」

主犯にされたフューリイは一瞬驚いた顔をして、それから小さく噴きだした。言いわけも反論もしようとせずに、一言「すみません」と謝罪する。

「あはは、謝らなくなつていいですよお。きつと悪いのは兄さんですもん。ね、そうでしょ、兄さん？ 嘘ついたらって、ちゃん分かるんですからね」

「いや。そ、それはだな」

「やっぱりね！ 人のせいにするなんて、さいってい！」

腕を組んでの叱責は、なかなかの迫力を帯びていた。シエラが眼を円くして、

「へえ……」と感嘆の吐息をもらす。

「フューリイさんに謝って！」

「ああ。……すまん、フューリイ」

「なによそれ？ もっとちゃんと頭を下げて！」

彼女がこれほど怒るのを、ヴォルグは今まで見たことがない。ぺこぺこ謝るアルベインの姿も、やはりそれにしかりであった。

「なあ、もういい加減に許してくれよ」

「うーん。まあ、このくらいにしておかないと、時間がもつたないもんね」  
くすりと笑ってみせてから、ルファールはいきなり大地を蹴った。

「いいわよ！ 私を捕まえたら許してあげる！」

「……ほんとだな？ あとから取り消しは聞かないぞ！」

「しないもーん！ それに、もう昔みたいにはいかないからね」

たちまち朝日を浴びつつの、追いかけてこがはじまった。

「あ、ちよつと！ 待ちなさいよお、あんたたち」

ぽかんと顔を見あわせてから、あわててシエラたちが後を追う。風のように駆けぬけていく彼らの姿を、通行人たちが呆気にとられて見送っていた。

街門の衛兵にいったん中断させられながらも、二人の決着はなかなかつこうとしなかった。男のアルベインがだらしない？ いやいやそんなことはない。慣れぬブーツをもともしない、ルファールが意外なまでに速いのだ。が、やがてやってきた急坂に、さしもの彼女も音を上げた。

「も、もうだめ……。こ、降参するよおお」

そこで胸をはってみせたとしたら、兄の面目が保てただろう。だが、アルベインははるか後ろで、手を挙げるのが精いっぱいだ。

「ほらね。あの子の先祖はやっぱり馬よ」

苦しそうなつぶやきに、ヴォルグは苦笑でうなずいた。まさか、これほど汗をかかされるとは。例の怪力ぶりといい、やはり人は見かけによらない。だが、いくらそんな彼女でも、少々調子に乗りすぎだった。

「ふう……」

森が深まっていくうちに、ルファールはだんだんと無口になった。背筋が前に折れはじめ、そのうち足まで引きずりはじめる。

「痛いんでしょ？」

にやつくシエラの問いかけに、びくりと首が跳ねあげられた。

「ど、どこですか？ 私、ぜんぜん平気です！」

「それならそれでいいからさ、とにかく止まって腰かけなさい」

「大丈夫ですう……」

「ぐずぐずしないで言うこときくの！ そしたら、ブーツを脱いで足見せて！」  
いきなり声を荒げられ、彼女は渋々ながらもしたがった。と、素足に巻いた  
白布に、じわりと血の色がにじんできています。

「やっぱりね。履きなれない靴であんなに走ったりするからよ」

「ごめんなさい」

半べそになったルフアールは、それだけ言って黙りこくった。すぼめられた  
肩に手をやって、シエラがくくつと笑いをもらす。

「ま、はじめての旅なんだからしかたないって。ただね、ルフアール」

「……はい？」

「せっかく一緒にいるんだからさ。遠慮しないで言いなさい。靴ずれだってひ  
どくしたらね、ろくに歩けなくなっちゃうんだから」

うなだれた頭をこつんと打った、拳が宙でふわりと開いた。それをしなやか  
に舞わせつつ、シエラは法語を唱えはじめる。

《実りを与えし大地の恵み。我らを支えし大地の力。我らを護りし父なるアラ  
ナス。汝の姿を今こそ見せよ……》

美しくつむがれる旋律を、ヴォルグはすでに何度も耳にしていた。得意の風  
の系統ではなく、大地の力を借りての《治癒》だ。

「どうしてだかは分かんないけど、こっちの方が効くのよね」

いつも聞かされている通り、術の効果は絶大だった。じわりと浮きあがった  
かさぶたが、たちまち生皮を埋めつくす。ほどなくそれがぼろりとはがれ、柔  
らかな肌色が現れた。

《治癒》は高度な技とはいえない。すべての術系に存在し、護衛者のたしな

みとしてヴォルグも使う。が、シエラのそれに比べれば、彼のものなど子どもの遊びだ。

「う、わあ……」

くりくりした眼を見開いて、ルフアールは呆気にとられているようだった。

と、そんな彼女の両腕が、いきなりシエラを抱きしめる。

「すごい！ やっぱり先輩ってすごいですっ！」

「あ！ や……、やああ！」

不意に両脇を絞めあげられて、小柄な身体がのけぞった。

「ちよつと、お。苦しい！ 苦しいってばー」

悲鳴をあげてもがいても、強烈な枷はゆるまない。必死の抵抗をつづけた末にようやく脱出できた時、シエラはすっかり涙目だった。

「あんた私の相棒なんでしょ どうして助けてくれなかったの？」

かすれた非難に、ヴォルグはにやつくだけだった。ああいうところを見てみると、どこかほっとさせられる。そんな本音を言ったなら、きつと拳が飛んできただろう。

宿で聞いていたとおり、アルモリカは小さく静かな湖だった。波おだやかな水面に木々や峰々が映りこみ、高価な鏡を思わせる。吹きぬけていく秋風にざわざわ頭上の枝がゆれ、そしてそのあちこちに歌う彼らの姿があった。背中の青と腹部の純白。そのいずれもが鮮やかで、嫌でも視線が引きつけられる。

「わああっ！ 想像してたより、ずっとずっと綺麗です」

濃密な木々の吐息のなかを、ルフアールの歓声がこだまする。ちゃんと言葉になっているから、少しは落ちついてきたらしかった。

つい先刻のことである。溪流で最初の一羽を見かけた時の、彼女の喜びようはすごかった。はらはら見守る一同をよそに、岩場をびよんぴよん跳ねまわる。シエラがあわてて引き止めなければ、急流にはまってしまうていたかもしれない。

「なんてすんだ声なんだろう……。ぴりりー、ぽぴりーってほんとに言ってる。父さんに教わった鳴き声をこうして生で聞けるだなんて……。あはっ！ なんか涙が出てきちゃう」

大切なペンダントを握りしめ、彼女は本当に泣いていた。せき止める指先をかいくぐり、すっと大粒の雫がすべる。鼻の頭をこすりつつ、アルベインも感極まっているようだった。

ただ容姿が美しいだけでなく、シアネは躍動感にあふれた鳥だった。青い軌跡を引きながら、水面ぎりぎりを飛んでいく。二羽がからみ合うように、宙になめらかな螺旋を描く。

「私、最高に幸せです。みんな本当にありがとう」

「はは……。そう言ってくれと、来た甲斐があったってもんだよな」

視線の置き場がなくなって、ヴォルグはとなりの相棒をちらりと見やった。

彼女は栗毛をいじくり回し、鎧の肩をすぼめてみせる。

じいっと様子を観察したり、風のように飛びゆく姿に何とか追いつこうと挑戦したり。シアネのそばで過ごす時間を、ルフアールは思う存分堪能していた。が、やがて彼らから離れた瞳が、今度はフューリイに向けられる。たたずむかたわらに駆けよって、彼女は腕を背中に組んだ。

「フューリイっさん！」

岩に腰かけたヴォルグとシエラが、どちらからともなく顔を見あわす。昼寝をしていたアルベインも、ごろりと身体を二人に向けた。

「なんででしょう？」

「えへへー。実はシアネに会うほかに、今日は目標があつたんです」

笑顔を眼前に突きだされ、フューリイの上半身がつつと下がった。空いてしまったスペースを、彼女は一步進んですかさず埋める。

「それはあ……、フューリイさんの歳を知ること！」

「は、あ？」

「すつごく若く見えますけれど、フューリイさんっておいつつなんです？」

こらえきれなくなったのか、シエラがぷぷつと噴きだした。どうにもずれたやり取りが、ヴォルグもおかしくてたまらない。

「二十歳、ですけど。歳相応に見えないでしょうか？」

「ぜんぜん！ だって、フューリイ君って呼んじゃおうかなって、ずっと迷ってたくらいですもん」

「はは。気にしなくてもかまわないのに」

困惑の表情を向けられて、彼女はくすりと身体を揺らした。背中の手をもじもじ動かし、照れくさそうに瞳をふせる。

「……してません。だって、そんなの口実ですから」

「口実？」

「ひよつとして、嫌われちゃってるのかもしれないあつて。いつも離れたところにいるし、笑っていても、笑ってないし」

「笑って……、いない？」

「眼が……。あ、し、失礼だったらごめんなさい！」

鋭い。身体を縮める彼女を見やり、ヴォルグは呆気にとられていた。あれほどはしゃいでいるなかで、それをしつかり見抜いているとは。

「あ、いえいえ。そんなことはありません。ただ……。ちよつと不慣れなだけです」

「不慣れって？ お話することに、ですか？」

「いえ、己をさらけ出すことに。でも、あなたにそう思われてしまうのは嫌ですね。もしも良ければ、シアネについても話しましょうか？」

「はいっ！ 聞かせて下さい！」

表情を輝かせるルフールに、彼は様々な話を語って聞かせた。シアネの故郷は、はるかな北の島であるということ。海を渡ってくる途中で、多くのものが落ちるということ。飛びながら虫を捕らえるゆえに、かごのなかでは生きられないこと。そして、おとぎ話になってはいるが、物語の登場人物たちは皆現実にはいたということ。

「ふ、うん。どうやらほんとに仕事じゃないんだ？」

そつと耳元でささやかれ、ヴォルグは口をへの字に曲げた。

「当たり前だろ。相棒の俺が言ったのに、それでも信じてなかったのかよ？」

「ごめんごめん。それより、ほら。あれ見てよ。なんか、いい雰囲気って感じじゃない？」

ぴつたり合わされた両手の先が、湖岸の一角を指ししめす。そこにはきらめく水面を背景に、肩をならべる姿があった。会話を聞きたがっているかのよう  
に、二人の周囲をシアネが飛びかう。

「冗談じゃない。だめだだめだ、あんな奴は」

アルベインの表情は、いたって真剣そのものだった。にやつくシエラをねめつけながら、二人の背中に声をぶつける。

「おーい！ そろそろ町に戻るとしよう！」

日が暮れぬうちに森を出るべく、帰路は休憩なしの強行軍になった。宿へ着くころにはさすがに息があがっていたが、待っていた温かい夕食がそんな疲れを癒してくれた。



翌朝の食事をすませると、一同は思い思いの時間を過ごした。まずはのんびりと身体を休め、それから町を散策しよう。そういう予定になっていた。

男部屋へと戻ったヴォルグは、フューリイと武具の手入れで時間をつぶした。ほどなくそれがすんでしまうと、窓枠にもたれて外をながめる。

人の数も面積も、ティエリアは付近で有数の規模をもつ。眼下の街道を見知らぬ隊商が通っていったり、山盛りの洗い物を抱えた主婦が井戸の周りを囲んでいたりと、はたまた弓を手にした狩人たちが昨日の山へと登っていったり。朝の町なみはなかなかのにぎわいをみせていた。

——アルベインの奴、ちゃんと会わせてもらえたかなあ？

朝食をあわただしくかきこんで、アルベインは「シアネ御殿」に出かけていった。取引先のないこの地方にも、なにか儲ける材料があるかもしれない。それを調べてくるのが、休暇の条件だったという。

「うふふ。多分そうするだろうって思っていました」

ルフアールも気にしていないようだったから、それはそれでいいだろう。うまくいこうがいくまいが、自分には関係のないことだ。ただよう草の香を味わいながら、ヴォルグはそう考えていた。しかし、やがてもたらされた言づてに、甘い腹づもりは消しとんだ。

「取り引きの話は追々進めることになったんだけどな。お近づきの印に夕食会でもって言うんだよ。もちろん、あんた達も一緒にね」

まったく思いがけないことだった。なんでも、知らない国や土地の話の色々聞いてみたいのだという。

そんな席に着ていく服など、持ってきているわけがない。シエラは強硬に拒否したが、兄妹そろつての説得に結局うなずくよりほかなくなった。

「これはアルベイン様。お待ちしております」

禿頭の執事が、褐色の扉を静かに開く。と、その向こうから広いホールが現れた。手入れの行き届いた白壁が、闇に慣れた眼にまぶしく感じる。そこで待つように言いのかし、執事は奥へ姿を消した。

「す、ごおい。まるでお城に入ったみたい……」

頭上のシャンデリアをおおぎ見て、ルフアールはすっかり圧倒されている。

一方、シエラの視線は、真下に向けられ動かない。

「ね、ねえ。ほんとおかしくないかなあ。どうせこんな格好してくるんなら、やっぱり鎧着てきた方が……」

「大丈夫だって言ってるだろう？ だいたい二度と会わない相手なんだし、お

かしきやおかしいでいいんじゃないか？」

面倒そうに受け流されて、シエラは激しく栗毛を揺らした。たじろぐヴォルグをにらみつけ、べえっと小さく舌をだす。と、そこで四方の扉の一つが開いた。

「ようこそおいで下さいました。私はマイアともうします」

青いドレスの若い婦人が、両手をそろえて礼をする。そっくりな顔たちの少女も、彼女の仕草をそのままねた。

「この子たちはアロンとニレーネ。さあ、ご挨拶なさい二人とも」

「はい。アルベインさん、こんにちは」

「僕、アロン！ 後ろの人たちはみんな護衛者なんでしょう？」

「わあ、かわいい〜」

ルファールが両手を広げると、ぱつと姉弟の顔が輝く。彼女に飛びつこうとでもするかのように、二人はまっすぐ駆けよってきた。その表情を見るだけで、愛されて育っているのがよく分かる。

「すみません。なんだか自分勝手に育ってしまっただけ。でも、ほんとに私も同じですよ。早くお話をうかがいたくて、耳がうずうずしていますの」

ドレスの裾をなびかせて、マイアは皆をいざなった。

「さあ、どうぞこちらに。主人も間もなくまいりますから」

「ほらあ！ 行こー行こー！」

はしゃぐ子どもたちに背中を押され、すべる石床を歩きます。くぐった扉の向こうでは、大きな食卓と立派な椅子が一同の到着を待っていた。先刻の執事が現れて、一人一人を席へと導く。

「どうぞお座りください」

「あ、ああ」

すたとんと落とされたヴォルグの腰を、柔らかな敷物が受けとめた。座りごちちはいいのだが、となりとの間隔があまりに広い。上座に空いたベルディアの席とは、会話をするのさえ大変そうだ。

「いやあ、お待たせしてしまつてすみません。商談の方が手間取りまして」  
間もなく小走りに飛びこんできたのは、それこそどこにでもいるような、ごくごく普通の男性だった。とはいえ、さすがに髪型はきっちりしており、服も清潔そうでびしつとしている。

「もーっ！ また遅刻うー！」

「お腹ぺこぺこになつちやたよお！」

非難の声を浴びせられ、ベルディアは頬の傷跡をぼりぼりかいた。剣によるものだろうその傷は耳の上を通りすぎ、黒髪のなかに吸いこまれている。ところどころ消えかけていて、かなり古いものと見てとれた。

「お招きいただいて感謝します。これを機会に、ぜひいい関係を築いていきましよう」

そう差しだされたてのひらに、彼は深いうなずきとともに応えてみせた。

「まずは妹のルファールです」

メイドが食前酒をつぎ回るなか、アルベインは連れを一人ずつ紹介していく。

「はじめまして！ 兄のこと、どうぞよろしくお願いします」

「これは元気な娘さんだ。お兄さまからうかがいましたが、なんでも酒場の給仕をしておられるとか？ よろしければ、うちの者たちにコツを教えてやって

下さる」

無論、社交辞令に違いない。が、ルファールの頬は、みるみる赤く染まっていった。軽く唇をかみしめて、自席の方へ後ずさる。

「わ、私なんかまだまだです。お店でもずっと失敗ばかりで。そういうことなら先輩に……」

「ふふっ。またまたそんな謙遜しちゃって」

「せ、先輩？」

「彼女の人気、すごいんですよ。失敗は……、あはっ！確かにちよっとしますけど、それも魅力の一つですから」

「失礼ですが、あなたは護衛者さんではありませんの？」

小首をかしげたマイアの問いに、にこりとうなずきが返された。珍しく彼女自ら語った事情に、夫婦は驚きを隠せない。

「護衛者のフューリイです。こちらのお二人とは護衛者仲間で、旅のお手伝いをさせてもらっています」

よどみのない嘘につづけて、彼は剥製の件を持ちだした。ベルディアは即座にうなずき、しかも進呈することを申しでる。そんな皆のやり取りを、ヴォルグはぼんやり見やるのみだった。

——うそ、だろ？

指が己の腰になにかを求める。が、そこに持つべきものはない。予備の短剣ともどもに、宿に預けてきたのであった。

「……ルグ？　ちよっと、ヴォルグったら！」

「あ、す、すまん」

相棒にてのひらを揺らされて、ようやく彼の瞳に光が戻った。

「大丈夫なの？ 顔色すつごく悪いわよ？」

「ああ、ちよつとくらくらつときただけさ」

テーブルに両腕を突きたてながら、ふらりと柔らかな椅子を離れる。

「俺はヴォルグ。もう聞いたと思うけど、護衛者でこいつの相棒ってことになつてる」

北方の街で、シエラとはじめて出会ったこと。紹介してやったナゼルの店で、給仕のルフアールと知り合ったこと。そして、アルベインに仕事を回してもらうようになったこと。

半年間の出来事をかいつまんで話すうち、彼の表情はいつものそれに戻っていった。

「ねえねえ。おじさんは、どうして護衛者をはじめたの？」

息子が発した問いかけを、かたわらのマイアがあわててさえぎる。

「これっ！ おじさんだなんて失礼でしょう？ ねえ、ヴォルグさん。まだ、そんなお歳じゃないですよねえ」

「いえいえ、かまいませんよ。気づかない間に、俺もずいぶん歳くいましたし」と、シエラとルフアールが、互いに顔を見あわせた。仲よくてのひらを口へと運び、なにやら意味ありげな笑いをもらす。そう出られてしまつては、ヴォルグも黙つてはいられなかった。

「お前さあ。俺といくつ違うんだっけ？」

「え？」

笑顔を顔に張りつけたまま、シエラはしばし言葉につまる。

「……三つ、よね？」

元から少し上がった目尻が、いよいよその度合いを強くした。が、それできかけた話の先を、ベルディアが強引に引きもどす。

「そういえば、先ほどから昔の話が出てきませんか？」

「……え？ そうだったかな？」

ヴォルグが視線をからめていくと、灰色の瞳はするりと逃げた。右に曲がった鼻筋を、指がせわしなくいじくり回す。その様をしばし無言で見やった後に、彼はアロンの肩に手を置いた。

「護衛者になったわけだったっけ？ 話してやりたいとこだけど、もう何年も前の話だしなあ」

「えーもしかして覚えてないの？」

「はは……。全部が全部ってわけじゃない。忘れたくたって、忘れられないこともあるしね。けどな、アロン。俺には今、こうしてることの方が大切なんだよ。どんな成りゆきだったにしても、その上に今の暮らしがあるんだからさ」

「なにそれ？ なんだか全然わかんない」

「すまんすまん。それじゃあさ、おわびにもっと楽しい話をしてやるよ」

傷跡だらけののひらが、我が子の頭を静かになでる。そんな二人のやり取りを、ベルディアはじっと見つめるのみだった。

続々と登場する料理は上品かつ贅沢で、その味を皆は存分に楽しんだ。とはいえ、ヴォルグの前の皿だけは、ほとんど空にはならなかったが。味が気に入らないのかと執事は散々心配したが、疲れているという言いわけに納得してくれたようだった。

スープに肉に柔らかかなパン、そして新鮮な野菜。最後に山の果物がふるまわれ、館での晚餐は終わりを告げた。

家の明かりも消えはじめ、通りを行く者はほとんどいない。見あげれば、星空に小さな満月が輝いている。

「ねえ、ヴォルグ？ ちょっと二人で散歩しない？」

シエラがそう切りだしたのは、宿へと戻る道すがらだった。

「だめですよお。ヴォルグさん、身体の調子が悪いんですから」

振りかえってとがめるルフアールに、彼女は平然と言いはなつ。

「だいじょぶだいじょぶ。こいつ、案外肝っ玉が小さいからさ。慣れない場所で緊張しちゃっただけだって。ねえ？」

「あ、ああ。そんなとこかな」

ルフアールがいくぶん不安げに引きさがってしまうと、もうシエラを止める者はいなかった。アルベインはすっかりできあがってしまったているし、フューリイは我関せずを決めこんでいる。

「それじゃ、決まりね。そんなに遅くはならないけどさ、もしもきつかったら先に寝といて」

シエラはそこで立ち止まり、皆の姿を見送った。それがやがて見えなくなるのと、相棒をおいてゆっくり二、三步先へと進む。

「ねえ、ヴォルグ？」

「ん？」

青いリボンがぐるりと回り、おだやかな微笑みがヴォルグに向いた。

「どうしたの？ さっきのあんた普通じゃなかった」

「ああ、あの時のことなら心配ないさ。お前の言うとおり、上がっちゃったんだらう」

「うそっ！」

彼女は声を裏がえし、小走りにヴォルグへ近づいた。きつくつかまれた両腕に、その勢いが直接伝わる。

「へたなごまかししてないで、ほんとのわけを教えなさいよ！」

「だから！ なんでもないって言ってるだらうが！」

反撃の怒声を浴びせられ、シエラはびくりと肩をすぼめた。腕を離して後ろに下がり、上目づかいにヴォルグを見つめる。

「なにをぎやぎやあわめいてる こんな夜更けにどこのどいつだ？」

近くの民家の窓が開き、ねまき姿の男が叫んだ。だが、月明かりに浮かぶ男の姿は、まるで凍りついたように動かない。しばらく様子をうかがってから、彼は咳ばらいを残して家中へ消えた。

「なによお。せっかく心配してやってるのにさ」

胸にかかった髪先が、風もないのに揺れている。

「いつつもいつつも隠しごととして。『素顔なんかいくらでも見せてやる』って、あんたあの時言ったじゃないよ」

そう。相棒になろうという申し出への、それがヴォルグの返答だった。

「……すまん。そうだったよな」

うかがうような互いの視線が、しばしの間からみあう。髪をぐしゃぐしゃとかき回しつつ、彼はそれを頭上に移した。数えきれない星々に、雲はまったく

かかっていない。明日からの帰路も、ずっとこの好天が続いてくれれば。会話に連れないはずの、そんな願いが彼の心をよぎっていった。

「だけど、勘弁してくれよ。いつかは話してやるからさ、それまで待つてくれないか？」

「……なによそれ？ ずいぶん勝手な言いぐさじゃない」

シエラは不満を隠さなかった。唇を大きくへの字に曲げて、ヴォルグをじろつとねめつける。が、大げさにため息をもらしてみせて、彼女はそれを笑みへと変えた。

「まあ、いつか。知ってたって知らなくたってどうせあんたはあんたなんだし、その方が興味も長くつづくだろうし。つて、こんな感じでどうかしら？ 相棒としては合格かなあ？」

「ああ、合格どころか満点だ」

「それは光栄の至りねえ。だけど、いい？」

たたずむヴォルグの眼前で、ぴんと指が立てられる。

「明日からはいつものあんたに戻ることに。ルフアールの件だけでも憂鬱なのに、よけいな心配なんかしてられないわよ。女々しくうじうじしてたりしたら……、ただじゃすまさないからね！」

「へいへい。まったく信用ないよなあ」

「当たり前でしょ？ 自業自得っていうやつじゃない」

彼女はふいとそっぽを向いて、そのまま足を踏みだした。ヴォルグが後から追いつくと、歩調を速めて引きはなす。人影まばらな通りを舞台に、奇妙な追いかけっこはしばらく続いた。

安定していた天候は、帰路が進むにつれて崩れていった。二日目の午後から雲が出はじめ、夜には小雨がぱらつきはじめる。時がたつにしたがって雨滴は大きく密になり、翌朝にはかなりの降りになっていた。

ただよう乳白のもやをぬい、ヴォルグたちは宿泊予定の町へと急ぐ。が、雨とぬかるみに邪魔をされ、なかなかペースが上がらなかった。

路傍には、粗末な小屋がぼつりぼつりと建っている。この付近の狩人が、休憩に使うものであるらしかった。が、さすがにこんな天気では、使われているものなど見あたらない。

「あはっ！ やっぱり、いいことばかりじゃすまないですねえ」  
皆に囲まれた馬上から、明るい声が響きわたった。ルファールに限った話ではない。悪天候をものともせずに、一行の雰囲気はなんら変わってなどいなかった。強いて相違点をあげるなら、フューリイの口数がそうであろうか。今もルファールのかたわらで、都の歴史を説明している。

「ねえ、ルファール？」  
それがやがてとぎれると、今度はシエラが口を開いた。雫がしたたるフードの奥で、馬上の後輩に微笑みかける。

「少しまじめな話をしようか？」

「……！」

人形のように動かないまま、ルファールは瞳だけを彼女に向けた。

「はい。なんの話かはだいたい分かっていますけど」

ようやく返されたうなずきに、今度はシエラが応えない。そんなじりじりさせられるやり取りを、ヴォルグは素知らぬふりで聞いていた。

「……ふうん。それなら話は早いわね。で？　ほんとにお店辞めちゃう気なの？」

「あはは。兄さんったら、やっぱりしゃべっちゃったんですかあ」

静かに脱がれたフードの下から、さばさばした笑顔が現れる。と、前をいく兄の背中が、たちまち小さく丸まった。

「はい、そのつもりです。楽しい思いでもたっぷりできて、やっと決心がつかしました」

「止めるつもりはないけどさ。せめて、理由くらいは教えてくれない？」

「やだなあ、先輩。そっちもちゃんと知ってるんでしょ？」

「だからなに？　知ってるとしたらどうだったのよ？」

背後の相棒を振りかえり、シエラはかすかに口元をゆるめてみせた。困ったような辛そうな、苦さを含んだ笑みだった。が、それはすぐにかき消えて、けわしい目つきが馬上を見すえる。

「私はね、ルフアール。ちゃんとあんたの口から聞きたいの。後輩づらして甘えてくるなら、そういうけじめもつけなさいよね」

「……つけてるじゃないですか。だから、言えなかったんじゃないですか」  
ルフアールは一步も引こうとしなかった。ついぞ現したことの無い反抗心が、声にも表情にも満ちている。

「私、先輩みたいに笑えない。先輩みたいに気がきかないし、お皿だってあん

なにうまく運べない。このままだったらつづけてたって、迷惑かけるだけですよ。私、そんなの嫌だから……、だから！」

「ばつかみたい。あんたつてさ、ほんとになんにも分かってないのね」

そつぽを向いた彼女のコートを、シエラは荒々しくひっぱった。むりやり己に向きなおらせて、邪魔だとばかりにフードをはずす。一向に弱まらぬ降りの中、長い栗毛が広がった。

「みたいにみたいにつて言う前に、もっと自分を見たらどう？」

「もういいです！ 私のことなんかほっといて！」

そつと触れようとしたシエラの手が、叫びとともに跳ねのけられる。

「……あ！」

強烈な腕力をもろに受け、シエラは大きくふらついた。そして直後に異変が起る。

二本の白い光線が、シエラのかたわらを横ぎった。ヴォルグの眼にはそう見えた。激しいいななきに空気が震え、暴れだした馬が兄妹を次々と跳ねとばす。

そこまでが、ほんの一瞬のできごとだった。

「きゃあああ！」

誰の助けも間にあわない。ルフールはぬかるみに身体をはずませ、それきり動かなくなってしまった。

「お、おい！ 大丈夫か」

泥だらけになったアルベインが、はいずるように駆けつける。それをちらちらと見やりつつ、シエラは状況の把握を開始した。

奇妙なうめきをあげながら馬はしばしふらふら歩き、やがて草はらに巨体を

沈めた。見れば、長いつらら状の氷が二本、その脇腹をつらぬいている。

「水の法術 いったいどこから？」

「あそこだっ！」

ヴォルグの指が示した先で、波打つ草原を男が走る。同時に前と後ろの二つの小屋から、武装した集団が現れた。住みかを踏み乱された鳥たちが、次々に空へ逃げ去っていく。

「ちよっと待つてよ！ 私たちなんか襲ったって、大した儲けにならないでしょう？」

張りあげられた呼びかけに、彼らは耳を貸そうとしない。が、シエラはそれでもあきらめなかった。

「今は戦いたくないの！ 剣をおさめてくれるなら、有り金全部さしだすわ」

「説得してもむだですよ」

歩みよってきたフューリイが、ぽんと彼女の鎧をたたいた。

「あの眼を見れば分かるでしょう？ 彼らの狙いは金じゃない」

ぼきぼき鳴らした両手の指を、彼は無気味にうごめかす。瞳に宿った冷たい光に、シエラの背筋を悪寒が走った。

「法術使いはあなた一人だ。あの時の約束、ちゃんとはたして下さいよ」

「言われなくなつてそうするつもりよ。ねえ、アルベイン！ その子、どんな様子なの？」

「あ、ああ、どうも気絶しているだけらしい」

「良かった……。それじゃ、いい？ 絶対そこまでは行かさないから、へたにうろちよろするんじゃないわよ？」

忙しないうなずきを確認し、シエラは迫りくる敵をねめつけた。数はこちらの三倍弱か。大きな得物を所持していない、法術使いらしき姿も数人見える。

「こいつらいったいなんなのよ？　なんで襲われなくっちゃならないの？」

舌打ちしてのつぶやきに、剣を抜きはなつたヴォルグが答えた。

「すまん、シエラ。どうやら読みが甘かった」

「……？　どういう意味よ？」

「あとでゆっくり説明するよ。だから、今は力を貸してくれ」

「もうっ！　あんた、そういうのぼっかりじゃない」

栗毛を荒つぽくかきあげて、シエラは唇をとがらせる。が、小さなうなずきが返されるのに、さほどの時間はかからなかった。

「決まってるでしょ。これでも相棒なんだから」

なめらかな旋律を背に受けて、ヴォルグが前方に走りでる。つづくフューリの足取りは、まるで草原を疾走する野獣のようだ。短剣を奇術師よろしく回してみせて、ぎらりと瞳を光らせる。

「覚悟してくださいね。私は手加減が苦手ですから」

倒れたルファールの楯となり、三人は襲撃者たちと対峙した。

「うう、ん……」

ルファールは夢を見ていた。ナゼルの店に、初めておもむいた日の夢だった。半年ほど前のことである。兄の誕生日になにを贈るか。あれやこれやと迷った末に、彼女はそこでの食事を選んだ。ちょうど仕事を辞めたばかりで、高価なものには手が出なかった。

そしてやってきた祝いの席は、彼女にとっても実に楽しいひと時だった。今では見なれてしまったが、飾られた数々の織物に彼女は感激しきりであった。そしてなにより、生き生きと働くシエラの姿に。

まるでシアネのような人。それが第一印象だった。人はあんな表情で働ける。そして他人を力づけてあげられる。

夢が壊れていくことに、くさくさしていた。笑顔を見るのが好きだから、人と接する時は無理をしても明るくふるまう。が、その裏側で、心は重たく沈みがちだった。

シエラの姿を見ていると、そんな自分をちっぽけに感じた。彼女のようにりたいと、心の底からそう思った。だから次の仕事に給仕を選び、店ももちろんそこにした。

店でのシエラは、とてもかわいく愛くるしい。仕事の技量はばっちりで、お客の評判も上々だ。そして、そんな彼女が、護衛者として広い世界を旅している。自分が夢みていたことを、ごく当たり前にしてみせている。

——先輩みたいになれるなんて、どうして思ったりしたんだろう？

ぼんやり己に問いかけながら、彼女はまぶたを持ちあげた。と、灰色の空を背景に、なにかが頭上にかぶさっている。何度か焦点を行き来させると、それがアルベインの身体と分かった。

「あ、痛た……」

そっと触れようとしたとたん、鈍い痛みが身体を走る。

そうか、自分は落馬したのだと、彼女はすぐに思いあたった。急に激しく視界が流れ、空や草原がくるくる回った。背中に痛みを感じたところで、記憶は

ぷつりと切れている。

「兄さん？」

彼の瞳は動かない。いったいなにを見ているのかと、痛みをこらえて首だけ回す。

「せ！先輩！」

傾いて見える大地を踏みしめ、シエラは見知らぬ男と相対していた。じりじりと間合いを取りあって、殺気の応酬をくりかえす。腫れあがり、髪の毛が張っていた彼女の顔は、必死の形相に満ちていた。店でのそれとは、正反対の表情だった。

顔だけではない。シエラはまさにぼろぼろだった。コートの合わせめが大きくはだけ、泥まみれの鎧や服がのぞいている。左腕はぶらりと下がり、踏みだす足どりがおぼつかない。

「な、なに、これ？」

いったいどういうことなのか、ルフールがそれを理解するより早く、男の足が大地を蹴った。二人の距離はたちまち詰まり、直後にシエラの身体がくの字に曲がる。

「がふっ！」

口から赤いものを散らした彼女は、二、三步よろよろと後ずさり、それでもなんとか踏んばった。が、ついにその膝がぐりと折れて、ぬかるみのなかに倒れこむ。うつ伏せになった小柄な身体が、追撃の蹴りに転がった。

シエラたちの戦いは、いよいよ終盤を迎えていた。いくら数の差があろうとも、双方の技量はあまりに違った。敵の多くはヴォルグとフューリイに斬り倒

され、シエラの法術の的となり、あるいはその鬼神のような戦いぶりに圧倒されて逃亡し、残りは片手ほどになっている。が、いよいよあと一息という段になって、三人はかなりの苦戦を強いられていた。

技量の低い者に数で攻めさせ、敵に疲れを蓄積させる。そんな意図には気づいたものの、ルフールたちが動けない以上、あえてのるしか道はなかった。

後方のシエラを襲ってきたのは、がっしりした体格の拳術使いだった。無論ヴォルグとフューリイが防ぐべき状況だったが、彼らとて残りの相手で精いっぱい状況だった。

強力な術であればあるほど、ふるうには相応の時間がかかる。直接敵と相対すれば、当然ながら分が悪い。

「……う」

腹に胸に顔面に、シエラは数えきれないほどの打撃を受けていた。意識がにごり、視界がぼやける。四肢が重く、握ったナイフがまるで鉛の塊のように感じられた。

「手こずらせる」

吐きかけられた唾を、彼女は拭うことすらできない。奪い取られてしまったナイフが、男のベルトに挟みこまれる。

「ま、待ってくれ！ 俺はどうなってもかまわない。だからこいつは、妹は見逃してやってくれ」

アルベインが上げた悲鳴に、男はためらいを隠さなかった。表情をくしゃくしゃに歪めてみせて、拳をぶるっと震わせる。が、それも、長くはつづかなかった。

「許せよ」

低い声でそれだけ告げて、彼は殺気をよみがえらせる。と、踏みだされたか  
けたその足に、シエラが腕をからみつかせた。

「行かせない。絶対に行かせないから」

「こ、こいつ、まだ……」

膨れあがった顔面を、激しい足蹴りが何度も襲う。が、靴底で肩を踏みにじ  
られても、ずるずると泥水のなかを引きずられても、彼女は力をゆるめない。

「離せ！ 離さんか！」

男が大きくふらついたのは、その叫びが終わるか終わらぬかのうちだった。

「先輩！」

草原を駆けてきたルフアールが、勢いのすべてをぶつけたのである。大きく  
崩れたバランスを、動かぬ足は戻しきれない。彼は切り倒された巨木のように、  
草葉のなかへもんどりうった。

「う……、わああああっ！」

言葉にならない叫びを発した、シエラの反応は早かった。しぶきを上げつつ  
飛びおきて、握った泥を投げつける。

「く、くそっ！ 眼が」

まだらの顔を拭う獲物に、彼女はそのまま襲いかかった。しがみつくように  
抱えた足を、身体全体で跳ねあげる。そして、転がりもがく男の腰から、奪わ  
れたナイフを抜きとった。

「この野郎おおっ！」

シエラにためらう様子はなかった。脈うつ首にあてた刃を、渾身の力で引き

よせる。たちまち生温かい霧が噴きあがり、彼女の顔を真っ赤に染めた。

「あ、い、いやあああああ！」

すべてを目の当たりにしたルファールの、高く長い悲鳴があがる。彼女は口をおおって立ちつくし、そして意識を失った。

ほどなく戦いは終わりを告げた。彼らは近くの小屋を借用し、そこでルファールの目覚めを待った。すでに暗くなりはじめているうえに、みな傷と疲れでぐったりである。馬を失ったこともあり、野営となるのもやむなしだった。

石組みの暖炉で炎が燃える。ずぶぬれになった彼らにとって、火が使えることはありがたかった。濡れた服を着替えてしまえば、寒さを感じることはない。

丸太の椅子に腰かけて、ヴォルグは相棒の横顔を見つめていた。ぬらした布を押しあてられた、赤黒い腫れが痛々しい。傷の手当てはしたものの、そこまではとても手が回らなかった。

食事をすませたフューリイは、となりの小屋へと出かけていった。命を奪わず捕らえた敵を、そこに閉じこめてあるのである。

「そんなに時間はかかりませんよ。こういうことには慣れてますから」

狙いと雇い主を白状させる。ヴォルグに頼まれるまでもなく、そのつもりだったと彼は笑った。

「さむい……」

ルファールはどうに意識を取りもどしている。が、その仕草や振るまいに、いつもの明るさや元気はなかった。

「やっと目が覚めたのね？ 良かったあ」

つい先刻のことである。触れようとした指先から、彼女は「ひっ」と身体を逃がした。もつとも恐れていたことが、現実となった瞬間だった。

「あ、ご、ごめんなさい。せつかく助けてもらったのに……、ごめんなさい先輩」

かすれきった謝罪の声に、シエラはてのひらを揺らしたただけだった。そしてずっと壁を向いたまま、己の影と向きあっている。

あまりに甘い判断だったと、ヴォルグはひどく後悔していた。フューリイはおそらく、予想通りの顛末を聞きだしてくるだろう。襲撃者たちの狙いが命そのものだったとすれば、欲しがりそうなのはたった一人だ。

「別にあんたが落ちこむ必要ないわよ」

「……！」

振りあげられた視線の先には、おだやかな相棒の笑いがあった。

「細かい事情は知らないけどさ、どうせあいつが絡んでるんでしょ？ あんた自身も驚いてたし、だったら仕方ないじゃない」

「お、お前……」

「隠し事したのはむかつくけどね。まあ、いい方に思っただけよ。だからほら、そんなにうじうじしなさんなって」

ヴォルグの額を指ではじいて、彼女はくるりときびすを返す。静かに歩むその先で、ルフアールが毛布にくるめた身体を起こした。

「どう？ これでおおっく分かったでしょう？ あんたの先輩は、あんたが思ってるほど立派でもかっこよくもないってことが」

血糊の残った髪をかき上げ、シエラはなめらかに言葉をつむいだ。

「懐いてくれるのは嬉しいよ。それに正直、気分も良かった。けどね、ルファール。いつも言ってることだけど、店での振るまいは演技なの」

うつむいてしまった後輩が、小さく左右に首を振る。と、彼女はくすりと笑いを挟んでみせて、同様の仕草で否定を返した。

「あんたがなんて言おうとね、あれは技術にすぎないわ。もちろん、お客さんだってそれを知ってる。あの人たちにとっての私は酒場のなかだけの存在だし、私にとっての彼らもそうよ。いくら笑ってみせたってそれは店のなかだけで。要は偽物……、物語のなかのシアネと同じね」

「そんなこと、ありません。だって先輩は……、あの晩に見た先輩は」  
つぶやきを絞りだす眼前に、人さし指が立てられた。しばし二人の会話はとぎれ、炎に薪がはじける音が急に大きく聞こえだす。

「ねえ、ルファール？ 本物のシアネを見てみてさ、あんた確か言ってたわよね。想像してたより、ずっとずっと綺麗な鳥って」

「……はい」

「私とあんたもそれに似てるの。あんたは私とは全然違う。だって、すっぴんでお客さんと向きあってるもの。お客が喜べばあんたも喜ぶ。満足しなげりや哀しがる。そんなこと、絶対私には真似できない。なにせ素直じゃないもんね」  
ルファールはなにも答えなかった。毛布の上で合わせた両手を、じっと見つめるのみである。

「分からない？ 私はあんたにはかなわないのよ。今はどうだか知らないけれど、いつか必ずそうなるわ」

彼女は言った。ルファールが非番の日には、同じ問いかけを何度もされると。

答えを聞いての落胆ぶりに、何度もプライドを傷つけられたと。

「作り笑いや歩き方や、それにお皿の運び方だけ？ そんなのは経験でどうにでもなる。だけど、それだけじゃ覚えられないものを、あんたはすっかり身につけてるの。だから、ね？ もっと自信を持ちなさい」

薄い木床に膝をつき、シエラは互いのてのひらを重ねあわせる。その姿にヴオルグは彼女の新たな一面と、そして過去のだんらんを垣間みていた。

数日つづいた雨もやみ、夜空には星々の姿が戻ってきている。

居間から突きだしたバルコニーで、ベルディアはおだやかな風をあびていた。妻や子どもたちは、寝室でとうに夢のなかだろう。夕食後の語らいを終えたのち、仕事が残っているからと彼は一人ここに残った。

青ざめた光が眼下の庭園を照らしだし、吹きあがってくる風が虫たちの歌を運んでくる。だが、ベルディアにそれらを愛でる余裕はなかった。

刺客たちをさしむけて、すでに五日が経とうとしている。が、いまだに報告はもたらされない。

従わせることが可能ななかで、最高の護衛者たちをさしむけたのだ。人数もはるかに多いのだから、失敗など絶対にあり得ない。自分を安心させるのに、彼は必死になっていた。が、そのたびに心のなかで声がする。「それならどうして戻ってこない？」と。

やらなければこちらがやられる。数年前、ルーデンスが旅の途中で斬殺されてしまったように。

若き日の罪業が許されるのなら、それを受け入れるべきとも思う。が、今の

自分には愛する妻と二人の子がいる。きっと、彼女らの命すら、復讐者は奪おうとするだろう。

「しかたない。また酒の力でも借りるとするか」

忌々しげにつぶやいて、ベルディアはガウン姿のきびすを返した。明日は大切な商談が待っている。無理にでも休んでおかなければならなかった。この地方に伝わる銘酒は、火がつくほどの酒精を含む。二杯も呑めば、ぐっすり眠らせてくれるだろう。

ぶ厚いカーテンを払いつつ、ベルディアはじゅうたん敷きの居間へと戻った。テーブルに置かれたろうそくが、壁を赤く染めている。と、そのすみで、三つの人影がゆらりと揺れた。

「そ、そんな」

「よお。お邪魔してるぜ」

ヴォルグが送った冷たい笑みに、彼は小さな悲鳴をもらした。あたふた逃げ場を求める視線を、フューリイとシエラがすぐさまさえぎる。

「わざわざ戻ってきた理由はさ、説明するまでもないわよね？」

「しらをきつても無駄ですよ。すべて彼ら自身から聞きましたから。脅したり金でつったり……、ずいぶん大あわてだったようですね。そうそう、一部はクルーニス殿の私兵であるとか？ どうりでなかなか手強いわけだ」

ベルディアは言い逃れようとしなかった。硬く唇を噛みしめた、その表情におびえは見えない。灰色がかった瞳のなかに、ヴォルグの姿が映りこむ。

「どうして、黙って行かせなかった？」

ベルディアの頬に残った傷を、鋭い剣先がゆっくりなぞった。

「分かってくれなかったのか？ 今の方が大切だって、俺はあんたに言ったんだ」

「……信じられるわけがあるまい。ルーデンスをやったのはお前だろう？」

「ああ、そうさ。あの時はこれっぽっちも迷わなかったよ。俺は、そのために護衛者になったんだしな」

「死罪になったとばかり思っていたが、まさか我が家を訪ねてくるとは。まったく運命とは皮肉なものだ」

実際、そうなる場所であった。なにしろ、町なかでいきなり斬りかかっていったのだから。

ヴォルグはすぐに捕らえられ、冷たい地下牢に放りこまれた。ルーデンスもまた有力な商人だったから、釈明など誰も聞いてくれはしなかった。ただ一人、突然牢にやってきた、將軍リュティスを除いては。

「殺すがいい。お前にはそうする権利があるからな」

長い長い合間をささみ、ベルディアは脱力したように膝を落とした。

「だが、この通りだ。あいつらは……、妻と子どもたちは勘弁してやってくれ」「へええ。ずいぶんと虫のいい話じゃないの？」

丸まり震える背中の上から、シェラが軽い調子の問いをあびせる。しかし、そんな声色と対照的に、表情は激しい怒りに燃えていた。

「ヴォルグの家族は遊び半分で殺しておいて、自分は許してもらおうなんて。それじゃ道理が通らないでしょ？ それにさあ……」

刹那、硬いブーツのつま先がベルディアの脇腹にめり込んだ。

「ぐ、はっ！」

ぐらつく彼の襟元を、痣だらけの手がつかみとる。それをぐっと引きあげて、シエラは鋭く平手をみまっした。

「あんたはあの子にまで手を出した！ 罪がないのはあの子も同じよ。ただ、旅をしたかっただけなのに。ただ、シアネを見たかっただけなのに。それをよくも！ よくもやってくれたわね！」

何度も何度もくりかえし、シエラはてのひらを往復させる。リズムを乱しはじめた彼女の腕を、やがてヴォルグがぎゅっと押さえた。

「だめっ！ まだよ！」

「それくらいにしとくんだ。あちこち痛みが残ってるんだろ？」

「でも……。でも！」

「いいから。後は俺に譲ってくれよ」

額をこつりと合わされて、上がりぎみの息がさらに乱れる。後退をうながすヴォルグの瞳に、彼女は渋々したがった。

「あんたを殺すつもりはないさ。優しい奥さんやガキどもに免じて、このまま素直に帰ってやるよ。けど……。これだけは言っとくぞ」

脇の下へと手を入れて、彼はベルディアを立ち上げさせた。そして、目にもとまらぬ素早さで、拳を顔面に叩きこむ。ベルディアはふわりと宙に浮きあがり、テーブルの上を転がった。

「また俺や仲間に出してみる。その時は絶対に容赦しない。友人思いの領主さんにも、きちんと伝えておくんだな！」

厚い扉の向こうから、誰かがぱたぱた近づいてくる。

「あなた？ いったいどうしたの？ ねえ、すごい物音がしたけれど？」

不安げなマイアの声色は、ほどなく高い悲鳴に変わった。腫れあがった顔から鼻血をたらす、夫の姿を見たからである。だが、彼をそんなめに合わせた輩は、すでに窓から逃げ去った後だった。

ベルディアが襲われたとの報は、町を風のように駆けぬけた。だが、物的損害が皆無だったことに加え、ベルディア自身の主張もあって、結局大がかりな追撃は行われなかった。

「無関係な者が血を流す必要はない」

伝えられたそんな台詞に民衆たちは感動し、ベルディアの評判はますます上がっていったのだった。



ヴォルグたちが都へ戻ってきたのは、その数日あとのことだった。五人ではなく、三人での帰着である。宿でルファールたちと落ちあうはずが、そこに彼女らの姿はなかった。妹の体調が優れないので、通りがかりの隊商に同行させてもらうことにした。そんな伝言を、宿の主人が伝えてくれた。

あの朝集合した草原を、夕日が赤く染めている。たたずむ彼らの周囲では、最後に残った隊商が遅い検閲を受けていた。閉門の鐘が怖いのか、早く身体を休めたいのか、馬も隊員たちも落ちつかない。

「どうする？ 挨拶の方すませておくか？」

そんなヴォルグの問いかけにシェラはしばし考えて、それから首を左右にふった。

「それは明日にしておいて、今夜は一杯つきあわない？」

「酒かあ？ お前から誘うなんて、どういう風の吹きまわしだよ」

シエラはさほど酒に強くない。呑みかわしたこともあるにはあるが、そのほとんどの食事がてらだ。

「まあ、いいじゃない。まだ懐にも余裕があるし、勘定は私が全部もつからさ。ね、よければフューリイも一緒にどうかかな？」

「うーん、残念ですがご遠慮します。ちよつと寄つていくところがあるもので」

「そう？ それじゃここでお別れね。また一緒になることもあるだろうけど、その時はどうかよろしく頼むわ」

「はい。色々とありましたけど、みんないい経験になりました。いつかまた、こんな旅ができるといいですね」

「意外ねえ、あんたがそんなこと言うなんて。でも、私はこんなのこりこりよ」  
ははつと苦笑をもらしてみせて、フューリイは草原をかけていく。その背中が門の向こうに消えるまで、二人は肩を並べて見送った。

「さあ、今夜は呑むぞお！」

身体をぐつと伸ばしたシエラが、茜に染まった空を見あげる。そしてそんな宣言どおりに、その夜の彼女は大いに荒れた。

「遅いわよお。エール、さつきから頼んでるのにい！」

喧噪にあふれた酒場の隅で、シエラの拳が突きあげられる。脇を行きすぎた給仕娘が、あきれた視線をちらりと向けた。

テーブルには同形の杯が何個もならび、あるいは横倒しになっている。そこに入っていた多量のエールは、すでにシエラの胃袋のなかだった。

はじめて入ったこの店は、ナゼルのそれよりはるかに広い。内部は吹きぬけ構造になっており、回廊状の二階にもたくさんテーブルがならんでいる。そのほとんどは埋まっていたが、ざっと眺めてみた限り見知った顔はいなかった。

「もういい加減にやめとけよ。朝になってから後悔するぞ」

そんなヴォルグのたしなめは、しかし完全に無視された。

「なあによお、あの眼。まったく、しつげがなっていないたら」

ぶつぶつ文句を言いながら、シエラは冷えたソーセージを口へと運ぶ。

圧倒されるヴォルグの前に、彼女はひたすら食事をほおぼり、そして次から次へとエールをあおった。店が看板になるまで二人は結局そこにいて、勘定はすべてヴォルグの払いとなった。まだまだ呑むのだと言いはるシエラが、財布を出さなかったからである。

「乗り心地悪い……。お、おろしてえ」

「おいおい、またかよお」

背負った肩ごしの訴えに、ヴォルグは嘆息しつつ天をあおいだ。

少し進んでは休憩し、公共の井戸で水を飲む。さらには見知らぬ家の便所を借りる。そんな状態だったから、彼女の家までの道のりは実距離以上に遠かった。そうしているうちに、酔いも落ちついてきたのだろうか。ヴォルグの肩に頬をのせ、彼女はようやく静かになった。

上弦の月もいよいよ高く小さくなって、街は静けさに包まれている。草の香りを含んだ風が、ほてった身体に心地よかった。

「ねえ、ヴォルグう。なんでこんな風になっちゃったのかな？」

耳のすぐかたわらで、シエラがかすれた疑問をつむぐ。眠ってしまったのか

と思っていたが、どうやらそうではなさそうだった。

「あなたと知りあってこの街に来てからさ、私どんどん弱くなってく。これくらいのことなんて、前はへっちゃらだったのに。なのにどうしてなんだろう？ あんたのせい？ 私のせい？ それともあの子やアルベインのせいなのかなあ？」

「違うよ、シエラ。それは違う」

静かに向けられた微笑みを、うるんだ瞳が凝視した。歩みの上下動に身をまかせ、彼女はつづきを待っている。

「弱くなったってわけじゃない。きつと、歳を食ったってということさ」

「ひ、ひつどおい！ どうせ私はおばさんですよおっだ！」

「おいおい、早合点するなって。そうだな……、抱えてるものが多くなったっていうのかな。お前も……、俺もね」

満天の星を見上げつつ、ヴォルグは数年前の己を思う。もしもあの頃だったなら、迷わず斬りすていただろう。しかし、シエラという存在が、ルフアーという存在が、アルベインという存在が、そしてベルディアの家族の存在が、殺意のいざないをかき消した。

「お前はほんと立派だったさ。全然弱くなんかあるもんか。それに……、そう言えるお前が俺は好きだよ」

彼なりに思い切ったの一言だった。が、シエラからは、なんの反応も返ってこない。不思議に思っって首を回すと、彼女はまぶたを閉じていた。試しに肩をゆすってみると、頭が左右にぐらぐら振れる。

「お疲れさん。久しぶりの我が家でゆっくり休めよ」

送ってやったねぎらいに、もちろん寝顔は応えなかった。そしてその直後、思いもしなかった災難が彼を襲うことになる。

「う、わっ！ お前、寝ながら吐くなよなあ」

すっかり寝静まった城塞都市に、ヴォルグの悲鳴が響きわたった。すえた臭いをこらえつつ、彼は下町の路地を疾走していく。一刻も早く、我が家で服を着替えたい。全身べとべとにされた彼に、もはやシエラを送り届ける余裕はなかった。

夜が深まるのを待つて、フューリイは主への報告におもむいた。

若き將軍、リュティスの屋敷は東地区の最深部、ガイゼル城のほど近くにあり。職務から言えば当然ともいえる一等地だが、敷地の広大さに比べて建物の造りはさして豪華なものではなかった。空いた土地には森さながらに果樹が植えられ、そしてその一角に、地下道で墓地とつながれた小さな木造平屋があった。

その一室で着替えをすませ、主の暮らす母屋へ向かう。夜陰に包まれた小径を行くと、虫たちが大合唱で迎えてくれた。

「実に見事なできばえですねえ。まるで今にも空に飛びたちそうだ」

ソファーに身体を沈めたリュティスが、手にした剥製をしげしげ見つめる。はおったガウンの紅に、鮮やかな青色が映えていた。

「で、どうでした？ いい旅になりましたか？」

「はあ、彼らにとっては分かりませんが……」

視線を動かさぬままの問いかけに、対座したフューリイは苦笑で答えた。

「個人的にはいろいろと得るものがありました。リュティス様に言われたことが、いくらかでも理解できたような気がします」

「はて？ いったい何のことでしょう？」

黒いくちばしに口づけし、リュティスは話を受けながす。子どものような振るまいを彼が本気でやっているのか、それともとぼけているだけなのか。長年仕えているフューリイにも、時に分からなくなることがある。

「出発前におっしゃったじゃないですか。私はその、見境なく殺しすぎると」

「ああ、そういえばそんなことも言いましたかねえ」

「それだけですか？ ……ひどいなあ」

「まあまあ。分かったのならそれでいいじゃないですか」

リュティスは剥製を頭上に持ちあげ、それから右に左にとすべらせはじめた。背に束ねられた金髪が、動きにあわせて左右にゆれる。

稀少な品も、彼にかかってはまさしく高価なおもちゃでしかない。まるで生きていくかのように柔らかな羽毛も、そこに宿る鮮やかな青色も、すぐに痛んでしまうのだろう。シアネの行く末を案じ、フューリイは虚しさを禁じえなかった。

「ところで、ルフアールというのはどんな娘でした？」

「な、なんです、いきなり。なにをお聞きになりたいんでしょう？」

「べつに。ただ、言葉通りのことをです」

そっけない言い回しと裏腹に、表情は好奇心丸だして輝いている。まったく困ったご主人様だ。手つかずだったワインを含み、彼は渴いた喉をうるおした。

「……いい娘です、とても。明るくて優しく、頭が良くて」

「そうですかそうですか。では、どうです？　もしも君が気に入ったのなら、いつそ交際でも申しこんだら？」

身を乗りだした主の前で、フューリイの背筋がえびぞった。気管に唾が飛びこんだのか、胸をたたいて激しく咳こむ。

「ば、ば、ばかを言わないで下さい！　そんなこと許されるわけがないでしょう？」

「どうしてですか？　私には、恋人どころか妻と息子がいますけど？　まずいですかね、そういうのって」

「あ、い、いえ。決してそんなつもりでは……」

「それなら、いいじゃないですか。君はねフューリイ。もっと色々な世界を見るべきですよ。まあ、そうさせてやれないのは、私の責任なんですけれど」

リュティスがたたえた微笑みは、その雰囲気を変えていた。空色の瞳がすまなげに、若き兵隊の顔を見つめる。

「お心づかい感謝します。だけど、やっぱり彼女はだめですよ」

ぽんと膝をたたいてみせて、フューリイは柔らかなソファアを離れた。

「あまりにもいい娘すぎて。私にはとてももつたいなさすぎます」

西へと向いた窓を開くと、厚いカーテンを夜風がゆらす。木々の向こうにくつもの屋敷がならび、二階のこの部屋からでもあまり見通しがいいとは言えない。

「それより……、お尋ねしてもよろしいですか？」

「ええ。なんなりとどうぞ」

「ベルディアという男のこと、はじめから御存知だったのではないですか？」

あの町にいるということもヴォルグさんとの関係も知っていて、だから私を行かせたのでは？」

自分の役割は、ヴォルグを守ることであったのだろう。そう、フューリイは考えていた。そして、伝えられぬまま行かされたことに、わずかながらも不満があった。

「物事にはね、フューリイ君。様々な側面があるものですよ。真実は決して一つじゃないんです」

いかようにもとれる答えを返し、リュティスは剥製を頭上にかかげた。この後、ベルディアとクルーニスが彼の有力な支援者となる、いやならざるを得なくなることを、フューリイが知る由はもちろんなかった。そして、ヴォルグに剣術の基礎を授けた男が、主の恩人だということも。

鋭いアララト山系の稜線が徐々に闇から切りはなされ、やがてまばゆい逆光に浮かびあがった。漆黒から藍、そしてほのかな桃色へと、大空が鮮やかな階調に染めあげられる。気の早い鳥たちがやかましくねぐらを飛び去ると、ほどなく城塞都市に朝日がさした。

家々の窓から朝食の香りがただよい、ほどなく急いた足音があちこちの通りに響きはじめる。それが主婦たちの挨拶に変わり、たくさんの干し物が風にはためく頃になって、ようやくヴォルグの部屋の窓は開いた。

「あー、やっと調子が出てきたわあ」

ベッドの上にあぐらをかいて、シエラは紅茶を一口すする。

「だけど、あいも変わらず汚い部屋ねえ。ほこりっぽいし、男臭いし、おまけ

に足の踏み場もないし。我ながら、よくもこんなところで眠れたもんだわ」

「おいおい。あんな目に遭わされたうえに、俺は床で寝たんだぞ」

昨夜のヴォルグの災難は、部屋に帰りついてからが本番だった。シエラを着替えさせるため、隣室の婦人をむりやり起こす。その後彼女をベッドに寝かし、て共同井戸まで洗濯に出かけ、帰ってきてからは二人分の鎧の手入れだ。ようやく寝ころぶことができた時には、薄い壁ごしに鳥たちのさえずりが聞こえてきていた。

「それもこれも、止めるのも聞かずにがばがばがば呑みまくるからだろう？」  
腫れぼったい眼ににらまれて、シエラは「うっ」と言葉につまった。寝癖のついた栗毛をゆらし、都の街なみへ視線を逃がす。

「だ、だからあ。最初にそうするって言ったじゃないよ」  
窓を横ぎるロープを使って、昨日の服が干されている。それをしばし見やっ  
たすえに、彼女は合わせた両手に額をつけた。

「……ごめん。悪いことしたって反省してる」  
小さくなって謝られると、ヴォルグもそれ以上は責められない。

「おわびの印って言ったらなんだけど、部屋の掃除でも手伝うからさ。二人で  
ばばつとやっちゃいましょうよ」

二人がかりということと、なによりシエラの奮闘のおかげで部屋はみるみる  
うちに広さを増した。足下は綺麗さっぱりかたづいて、積もっていたほこりも  
すでにない。久方ぶりに見る床が雑巾でみがかれ油を引かれ、艶と輝きを取り  
もどしていく。

「もう、こんな時間かあ。さすがにちょっと手こずったわねえ」

ぴかぴかの窓枠にもたれかかって、シエラが街壁に沈み行く夕陽を見つめる。彼女は後ろを振りむかぬまま、ベッドで寝ころぶヴォルグに告げた。

「今夜、店が引けた後でナゼルに会うわ」

「ああ……。色々考えて決めたんだろうし、今さら反対する気はないさ」

勤める店を変えるつもりだ。彼女がヴォルグに打ちあけたのは、一昨日の晩のこと。野営の食事のすぐあとだった。

気まずいからだと言った。知られたくない者に知られた時は、いつもそうしてきたのだと。店で顔を合わせるたびに、ルファールも自分もあの戦いを思いだすに違いない。それではお互いにやりにくかろうと。

「ごめんね、せっかく紹介してもらった店なのに。でも、ほら。これからは、いつでも好物にありつけるじゃない？」

苦笑を返すヴォルグの横へ、彼女は静かに腰かけた。そして寝ころんだ身体に被さるように、肩の向こうへ腕をつく。

「お、おいおい……」

「しいつ。大切なことだから黙って聞いて」

まっすぐ垂れた栗毛の先が、動揺の表情をふわりとなでる。

「もしもよ？ もしも私がレファイタルに……」

瞳をうるませたの問いかけは、しかし紡ぎきられる前にぷつりと切れた。廊下の床がどたどた鳴って、まるで弾けどぶように扉が開く。

「あーっ！ やっぱりこっちにきてたんですね？」

息せききって現れたのは、給仕姿のルファールだった。言葉を失う二人の間を、明るい笑顔が行き来する。

「お帰りなさい、ヴォルグさん」

「あ、ああ。ただいま」

「先輩、先に戻っちゃったりしてごめんなさい」

「そ、そんなのどうでもいいけどさ。あんた、いったいなににきたの？」

「やだなあ。先輩を連れにに決まってるじゃないですか」

スカートとエプロンをひるがえし、彼女はかるやかにシエラへかけよる。汗の滴が二つぶ三つぶ、みがきたての床で飛びちった。

先刻、フューリイが帰着を伝えにきてくれた。乱れた息に挟ませた、それが彼女の説明だった。

「なのに、いつまで待っても来ないんですもん。買い出しも掃除も、とつくに終わっちゃいましたよお？」

とにかくシエラの自宅に向かってみたが、着けば主が戻った気配などない。そこで、もしかしたらとこちらに回ってみたのだという。

ナゼルも首を長くして待っている。だから、早く仕事に行こう。そんな後輩のいざないに、シエラは困った表情を返してみせた。

「それなんだけどさあ。実はあんたにもナゼルにも悪いんだけど……」

「待って！ その前に私の話を聞いてください！」  
たちまち絡みあった視線の長さを、ルファールは静かな足取りで縮めていった。

「あれからずっと考えて、それでやっと決めました。私、やっぱりお店辞めません。だから、先輩ももっと自信を持ってください。自分のこと、偽物だなんて言わないでほしいんです」

「ちよつとちよつと、どうしてそういう話になるの?」

彼女がフューリイから聞かされたのは、帰着の知らせだけではなかった。が、それをシエラが知るよしはない。

「あんたにどう見えようと、それでどう思おうと、私のことは私が一番分かってるわよ」

彼女は乾いた笑いを声に含ませ、首を大きく左右にふった。が、あわせて揺れる両腕を、そこでルフアールがいきなりつかむ。

「……きゃー!」

かすかな悲鳴を気にもせず、彼女はシエラを引きよせた。くりくりした眼が険しくなつて、やがて怒りをほとばしらせる。

「私をばかにしないで下さい! どうしてそんなこと言うんです? なににびくびくしてるんですか? 人を子ども扱いする前に、自分がしっかりして下さい!」

「なんですって? あんた……、誰に向かって言ってるの?」

青い瞳にねめつけられても、ルフアールはまったく怯まなかった。視線をそらさず、腕も離さず、真摯な表情で訴えかける。

「護衛の仕事がどういうものか、それは分かったつもりです。ああして戦ってる先輩は、確かに本物なんでしょう。でも、だからって、他はぜんぶ偽物ですか? 先輩って、そんなに薄っぺらなんですか?」

ベッドで頬杖をつきながら、ヴォルグは呆気にとられていた。語尾のしつかりした物言いを、やけに大人びたものに感じたのである。唇を引きしめる表情に、おびえや遠慮はかけらも見えない。

「分かってないのは先輩の方ですよ。だって、なんにも知らないじゃないですか。自分がどんなにぴかぴか光ってるのか。どれくらいのお客さんに、笑顔をわけてあげられてるのか。そんなことすら知らないじゃないですか」

肯定も否定もしようとせずに、シエラは後輩の瞳を見つめつづけた。が、しめつけられた小柄な身体が、ほどなくふるふる震えはじめる。それは次第に大きくなって、やがて一気にはじけた力がルファールの腕を左右に飛ばした。

「へへーんだ！ やられてばかりじゃないからね！」

奮闘の末に乱れた髪を、シエラは誇らしげにかき上げた。紅潮しきった口元に、やがてにやりと笑いが浮かぶ。

「……かわいくないわね。人の言葉を逆手にとつてさ」

「かわいくなって結構です。だって、あなたの後輩ですから」

瞬時に返されたうなずきに、彼女はふいとそっぽをむいた。ため息につづいて上がった腕が、ルファールの顔をまっすぐ指さす。

「あっそ。あんたがそういうつもりなら、これまで以上にびしびしいくわよ。いくら泣きべそかいたって、今度は放っておくからね」

「……！ やったあ！」

薄い木床をたわませて、ぴよんとルファールが飛びはねた。

「さあ、それじゃお店に行きましょう！ 早くしないと、ナゼルさんに怒られちゃいます！」

彼女はシエラの手を取って、扉に向かって走りだす。

「あ、ちよ、ちよっと待ってよ。痛い、痛いってば！ 肩が抜けちゃったらどうすんのよお！」

「早くシチューを教えてもらえよ。俺の愛想がつきないうちにさ」

ベッドででのひらを振るヴォルグに向けて、恨めしげな視線が送られた。が、それ以上なにもできないままに、シエラは廊下へ引きずられていく。

「レフィタル、か……」

相棒が生まれた国の名を、ヴォルグはそっとつぶやいた。

聞かずとも、彼女がつづけようとした言葉はわかる。それにうなずくということとは、つまり白狼を抜けるということだ。

さして遠くない将来に、転機はやってくるのだろう。それが、はじめての、なにより最高の相棒との別れの時になるのだろうか。

「ヴォルグさん」

開けはなたれたままの窓から、ルフアールの呼び声が飛びこんでくる。身を乗りだして見おろすと、たたずむ二人と目があつた。

「行ってきまーす！ またお店に来て下さいねー」

ぺこりと頭を下げてみせ、ルフアールがはずむように走りだす。苦笑で首を振ってみせ、シエラも彼女の後ろにつづいた。

夕闇広がる下町を、二人はかるやかに駆けていく。アルモリカ湖で見たシアネのように、からみあうかごとき螺旋を描いて。

草の香りをふくんだ風は、秋の涼やかさにみちていた。季節はいよいよ変わりつつある。あの青い鳥たちは、もう渡りに出かけてしまっただろうか。彼女らの背中を見送りながら、ヴォルグはぼんやりと思うのだった。

着 稿 二〇〇〇年 四月一日

第四版 二〇〇〇年 七月二四日